

岩波文庫

642

紫式部日記

池田龜鑑校訂

岩波書店

岩波文庫

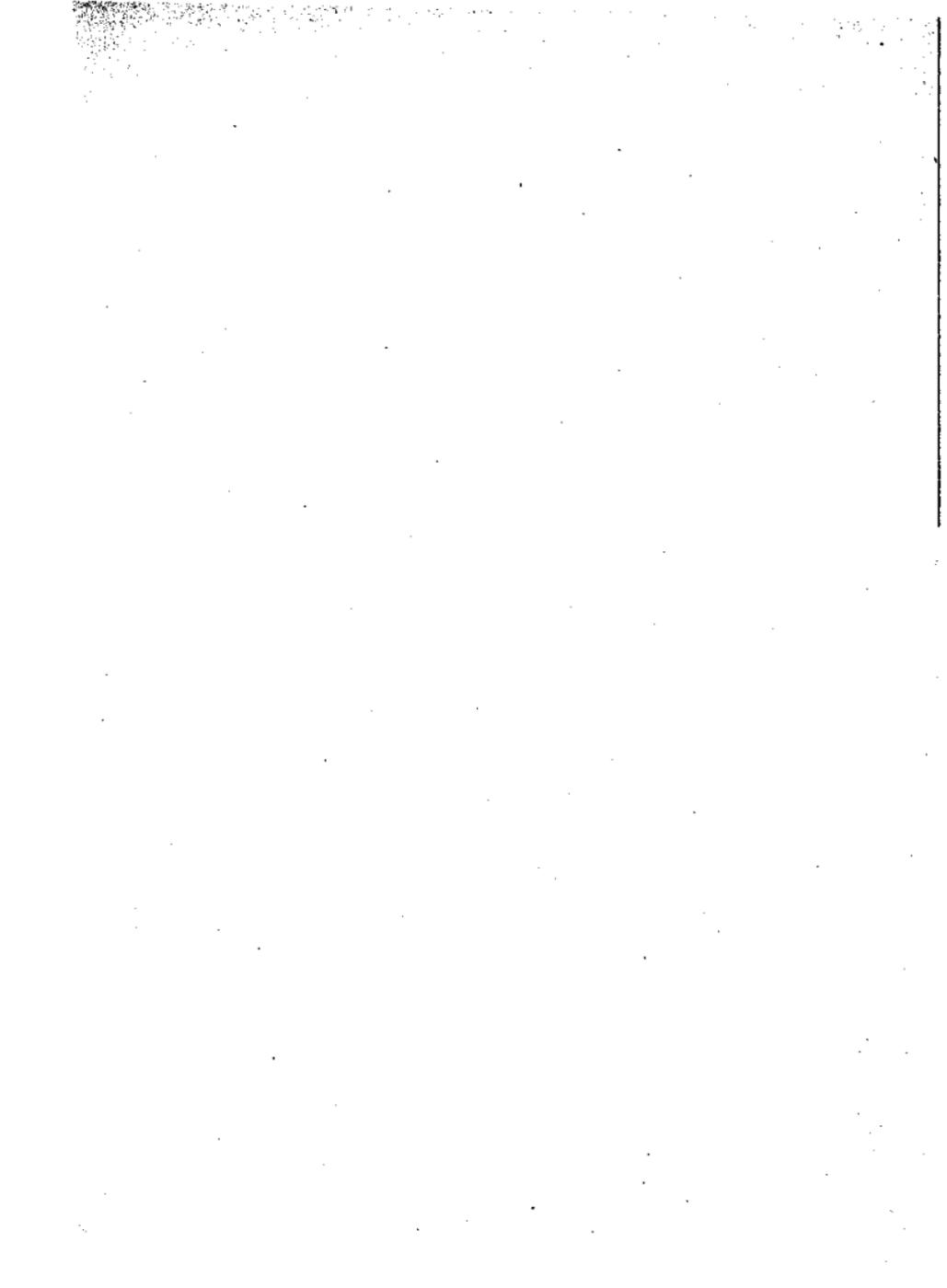
642

紫式部日記

池田龜鑑校訂



岩波書店



解 説

紫式部日記は「むらさきしきぶが日記」と無名抄にあるやうに「が」又は「の」の字を附してよぶのが古いよび方であらう。明月記には、別に「紫日記」ともあり、又さういふ題簽を附した古寫本も現存してをる。又單に紫式部とのみ呼んだ例もあることが、類聚名物老に見えてゐる。

解

この日記は、普通二卷二冊になつてゐる。本朝書籍目錄にも二卷となつてゐる。但し今傳はる諸本は原本のまゝのものではない。もとは如何なるものであつたか、これについて諸説がある。中根香亭氏の説には、元來この日記は數十卷あつたものを、式部がその中から數節を抄出して、別に消息文を添へ、他によせたものであらうと云ひ、明治卅二年の刊行にかゝる木村正三郎氏の紫女手簡には、日記は抄録にあらずして、脱漏であらうと云つてある。關根正直博士は、その著紫式部日記精解に於て、もと大部のものにあらず、短篇零冊に過ぎざるべしと云はれてゐる。一體榮華物語初花の卷は、この日記をもとにして書かれたものであるらしく、榮華の成立する頃には、この日記の完本があつたと思はれる。宮内省圖書寮に「日記歌紫式部」といふ寫本があり、内閣文庫にも「紫式部日記歌」といふ同じ内容の寫本がある。この題號は、如何なる理由によつて附せられたのか明かでない。普通に考へれば、この集の編者が、紫式部日記中から抄出して、その故にかゝる集名を附したものと思はれる。もしさうであるとすれば、この本の中の歌は、こ

説

8

とごとく紫式部日記中の歌であるべき筈である。しかるに、集中の大部分の歌は現存のこの日記に見えない。すると、この集は、日記の原本から書き抜かれたもの、従つて現存の本は散佚後の殘缺本であることが想像される譯である。この稿筆者は、天和二年書寫の寫本を所持してゐるが、その本の奥に、「或說紫式部日記の中に有といひならはして物にかきたるは」と題して、六首の歌と、相當に長い詞書とを記してゐる。これ等は、前記「日記歌」又は「紫式部日記歌」の卷首の六首をそのまま轉寫したかの如く見える。もし右の「物にかきたるは」の「物」が集以外の或る記録であるとすれば、(校訂者はまださういふ記録を見ない)紫式部日記の原形を推定する上に於て、有力なる資料となるであらう。又もし、「物」が集そのもので、集の中から抄出されたのであるとせば、少くとも天和二年の頃は、前記の「紫式部日記歌」といふ本が、引用されるだけ信用されてゐた一つの證據となるであらう。この「日記歌」は、帝國圖書館にも別の題號の本の中にをさめられてゐるが、とにかく、日記そのものとはより、榮華物語、紫式部集をはじめとして當時の女流私家集と聯關して考へて見なければならぬもので、すぐそのまま受け入れる譯に行かない。しかし、紫式部日記を考證し、紫式部の傳記を調査する際、必ず見なければならぬ本であることは申すまでもない。校定者にも別に考があるけれど、煩雜に流れるからこゝに省く、しかし、學者研究の便を計つて、本文庫の附録として全文ををさめることにした。

この日記は、寛弘五年の秋にはじまり、六年、七年正月までの事が記されてゐる。日記とは云ふけれど、日次を逐うて記録されたものでなく、後から記憶をたどつて追記したのではないか

紫式部日記

と思はれる。しかし、中には精密な服飾の描寫などもあつて、必ずしもさうと斷言する譯に行かない。さういふ部分は、當時折にぶれて書きとどめておいたのを、後から修補訂正してまとめたのではないかと思はれる。

解

紫式部日記には、現存する傳本が甚だ少い。最も古くかつ一般に流布してゐる系統の本は、伏見殿邦高親王自筆本を寫した本である。群書類従所收の本は、奥に「右以伏見殿邦高親王御筆之本書寫一校畢」とあり、更に「右紫式部日記以屋代弘賢本書寫以流布印本及扶桑拾葉集校正畢」とある。屋代弘賢の本は、邦高親王の本をもつて書寫した由の奥書を有する本を轉寫したものであらう。しかし今の阿波國文庫にはない。神宮文庫には、天明四年甲辰八月吉日奉納の寫本があるが、やはりこの系統の本である。この稿筆者所持の三種の古寫本中一種は、奥に「伏見宮邦高親王 御在判」とあつて、「右以伏見殿邦高親王御正筆之本書寫一校畢。明曆二年二月十八日、小少將」とあり、その次に、「右此日記上下以戸川土佐守安宣所持之本令書寫者也。尤謬誤等多之。天和二年十一月十四日」とあり、本文は他の異本をもつて殿密に校合してある。本文庫は主としてこの本を底本として諸本を參考した。次に他の一種は、奥に「寛永元甲申年六月、於勢陽松坂書寫之」とあり、その前に「邦高親王御在判」とあつて、群書類従本と同様の奥書を持つてゐる。邦高親王は、康正二年に生れ、享祿五年三月、年七十七をもつて薨せられた人であつて、現存諸本はいづれもこの系統のものである。書寫年代は新しいが、靜嘉堂文庫所藏本もこの系統のものである。又一本は、年號は見えないが、徳川中期の頃のもので、扶桑拾葉集に近い本文をもつてゐ

説

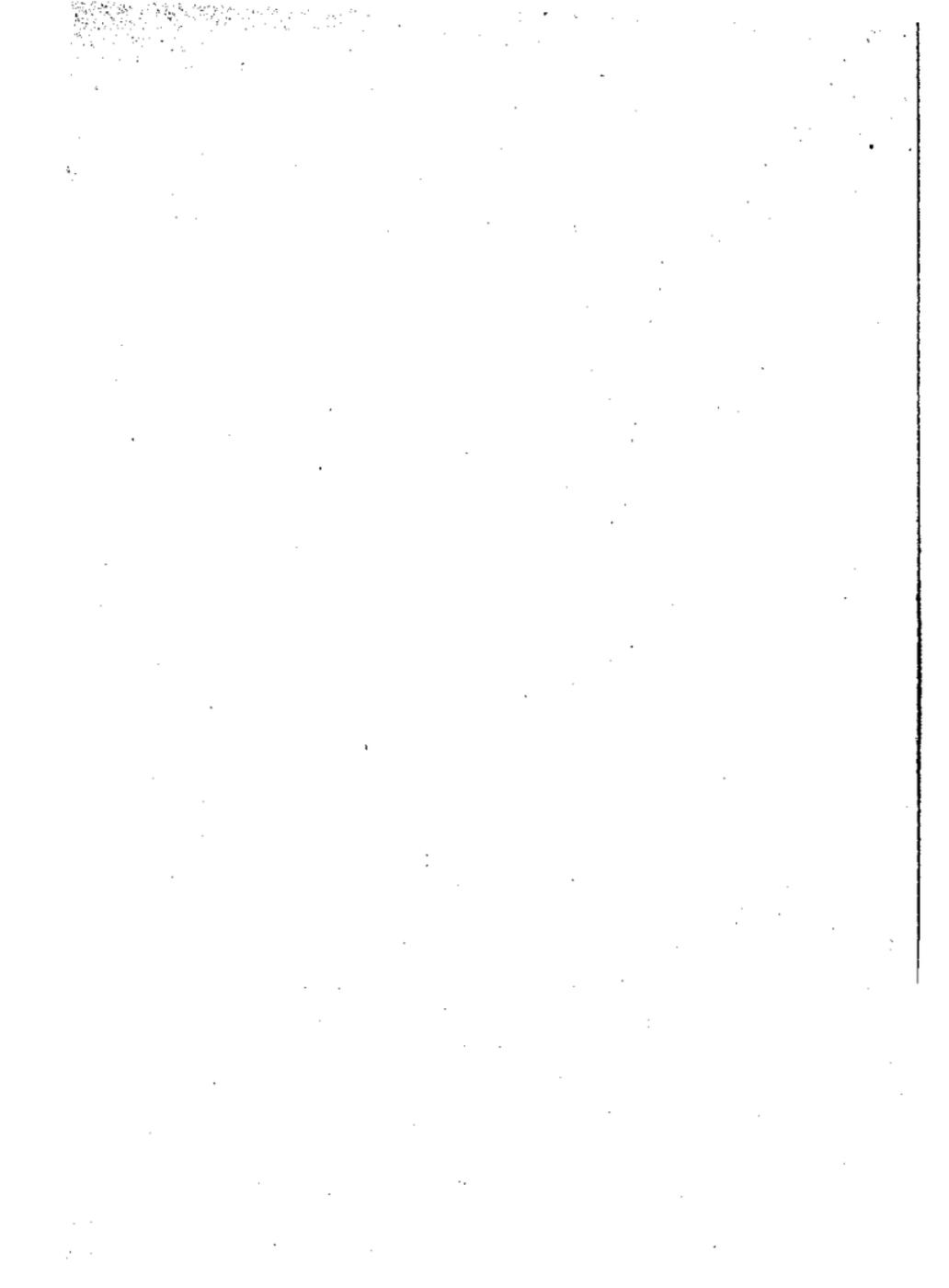
る。南葵文庫所蔵の本には「右一卷以梨雲亭書本謄寫之更加一校畢」とあつて、嘉永三年の書寫である。彰考館所蔵の本は、拾葉集本と同じ系統のものである。岩瀬文庫の蔵本はまだ見ない。なほ刊本としては、壺井義知の紫式部日記傍註があり、清水宣昭の紫式部日記釋がある。いづれも邦高親王本より古い本の系統のものではないのみならず、かなり本文が亂れてゐる。

紫式部日記は、二つの部分から成立してゐる。その第一は純粹な日記文であり、その第二は消息文である。消息文の混入については、はじめ紫女手簡の著者木村架空氏によつて論證せられ、後紫式部日記精解の著者關根正直博士によつて更に考證確定された。この二つの部分は、もと別別のものであつたであらう。書簡の方は、式部が、その女大貳三位か、誰かに與へたものらしく、懇々と説き戒める心持が文字の底に動いてゐる。おそらく、これ等の子女の誰かが、母の日記を授けられた際、書簡をも一まとめにして綴ぢたものであらう。しかし、その書簡の部分が、六年正月三日と十一日との記事の間にはさまれてゐるのは不思議である。消息文中、中宮太夫齊信のことを書きたる條に「下腐のいであふを、大納言心よからずと思ひ給ふなれば云々」とあり、「傍註」には、大納言を道綱としてゐるけれど、前後の關係から考へると、こゝは必ず「宮の太夫」と同一人でなければならぬ。しかるに齊信が權大納言となつたのは、寛弘七年二月廿六日のことであるから、この消息文は、その時以後に書かれたものであると見なければならぬ。さすれば、消息文が假りにあとから綴ぢ加へられたものであつたにせよ、こゝに挿入せらるべき筈はない。やはり日記全體が、一度散佚した後、かく粗雑に綴ぢ合はされてしまつたとも考へられる。

さて、日記の部分は、寛弘五年七月、秋の土御門殿の情趣に筆を起し、當時の道長邸の様子を記し、次に中宮御産の模様、御産後の儀式等について述べ、更に交友のこと、道長のこと、五節その他の公事のこと等を記し、翌六年正月の御戴餅のこと、翌七年正月のこと、三宮御五十日の公事などに細かに記されてゐる。消息文は、同僚官女を批評し、齋宮の中將、和泉式部、赤染衛門、清少納言、左衛門内侍(この本齋宮の内侍)等の上に及び、處世上又は藝術上の諸問題について教訓をのべたものである。

紫式部日記は、御産次第、公事、風俗、信仰等の文明史又は風俗史の資料として重要であるのみならず、紫式部の閨歴、言行、性格等の研究資料として、貴重なる文獻である。文學的作品として見れば、宮廷女流に於ける浪漫的精神が、和泉式部のやうな「戀愛的」なものから、次第に深まつて「人間愛的」なものに達した心の所産であると考へたい。この日記に於ける理想主義的な傾向は、やがて源氏物語に於ける幻想的な傾向と共通する。更級日記の夢幻に至る過程として、紫式部日記中の幻想的なものは注目せらるべきであらう。

この日記を研究する上に於て、必ず見るべき徳川時代の参考書は、紫式部日記傍註二卷(壺井義知)紫式部日記釋四卷(清水宣昭)紫式部日記解(國文註釋全書所收。足立稻直)等である。なほこの日記について述べたいことは多いが、限られたる紙面であるから、今はすべてを省略しななければならない。



凡 例

一、本書は、明暦二年二月十八日、伏見宮邦高親王自筆の本を以つて書寫したる由の奥書ある本を、天和二年十一月十四日に轉寫せしといふ本をもつて底本とし、別に同系統の本一二を參考せり。

一、本書は、なるべく原本の面影をとどめむことに努めたれど、讀者の便を計らんがため、假名には漢字をあて、文字、假名遣の誤を正し、かつ句點讀點を附することとせり。

一、假名を漢字に直す際には、振假名を附して、原本の面目を存したり。それ故に振假名なき漢字は、すべて原本もまた漢字にて記されたるものとす。

一、「紫式部日記歌」は、内閣文庫藏の古寫本を底本とし、まゝ宮内省圖書寮藏の一本を參考して、不審を散じたり。この歌集につき、校訂者もまた私見なきにあらざれど、今は煩はしければ之を省く。

一、本書の校訂にあたりては、畏友松田武夫氏の懇ろなる援助を得たり。記して君が友情を謝

すと云爾。

昭和五年二月

校訂者識

紫式部日記

紫式部日記

秋のけはひたつまゝに、土御門殿の有様、いはんかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水の邊の草むら、おのがじし色つきわたりつゝ、大方の空も艶なるに、もてはやされて、不斷の御讀經の聲々、あはれまさりけり。やうく涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なむ、夜もすがら聞き紛はさる。御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、きこしめしつゝ、憫ましうおぼすべかめるを、さりげなく、もてかくさせ給へり。御有様など、いとさらなる事なれど、憂き世の慰には、かゝる御前をこそ、尋ね参るべかりけれと、現心をばひき違へ、たとしへなく、よろづ忘るゝにも、かつはあやしき。

まだ、夜深きほどの月さし曇り、木の下を闇きに、御格子まゐりなばや。女官は、いまださぶらはじ。藏人まゐれ。などいひしろふ程に、後夜の鐘うち驚かし、五壇の御修法、時始め、われもくと、ときあげたる伴僧の聲々、遠く近く、聞きわたされたる程、おどろくしくたふとし。

観音院の僧正、ひながしの對より、二十人の伴僧を率ゐて、御加持にまゐり給ふ足音、渡殿の端の、とどろくと、踏みならさるゝさへぞ、ことことのけはひには似ぬ。法住寺の座主は、馬場のおとど、へんちじの僧都は、文殿などに、うちつれたる淨衣姿まで、ゆる／＼しき唐橋どもを渡りつゝ、木の間をわけて、かへりいるほど、遙かに見やらるゝ心地してあはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳を敬ひて、腰をかがめたり。人々參りつれば夜も明けぬ。

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうちきりたる朝の露も、まだ落ちぬに、殿歩りかせ給ひて、御隨身召して、遣水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花の、いみじう盛りなるを、一枝折らせ給ひて、几帳の上よりさし覗かせ給へり。御さまの、いとほづかしげなるに、我が朝顔の思ひ知らるれば、「これ遅くては、わるからむ」と、の給はするにことづけて、硯のもとによりぬ。

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそつらけれ

「あなと／＼」と、ほゝ笑みて、硯召しいづ。

白露はわきてもおかし女郎花心からにや色の染むらむ

しめやかなる夕暮に、宰相の君とふたり、物語してゐたるに、殿のうち藤三位の君、簾のつま

引きあげてゐ給ひし。年の程よりはいとおとなしく、心にき様して、「人は猶心ばへこそ、難きものなめれ」など、世の物語、しめじめとしておはするけはひ、をさなしと、あなづり聞ゆるこそ悪しけれと、恥かしげに見ゆ。うちとけぬ程にて、「多かる野邊に」と、うち誦んじて、立ち給ひにし様こそ、物語に賞めたる男の心地し侍りしか。かばかりの事の、うち思ひ出でらるゝもあり。その折は、をかしきことの過ぎぬれば、忘るゝもあるはいかなるぞ。

播磨守碁の負わざしける日、あからさまに罷出て後にぞ、碁盤の様など見給へしかば、華足など、ゆゑ／＼しくして、洲濱のほとりの水にかきませたり。

紀の國のしらゝの濱に拾ふてふこの石こそは岩ほともなれ

扇どものをかしきを、その頃は人々持たり。

八月廿日あまりの程よりは、上達部、殿上人ども、さるべきは、皆宿直がちにて、階の上、對の簀子などに、皆、うたゝ寢をしつゝ、はかなう遊び明かす。琴、笛の音などには、たど／＼しき若人たちの、とねあらそひ今様歌とも、所につけては、をかしかりけり。宮の太夫なりのぶ、左の宰相中將種房、兵衛の督、美濃の少將濟政などして、あそび給ふ夜もあり。わざとの御遊は、

殿おぼすやうやあらん、せさせ給はず。年來里居したる人々の、中絶えを思ひ起しつゝ、参り集ふけはひ、睡がしうて、その頃はしめやかなることなし。

廿六日、御薬物合はてて、人々にも配らせ給ふ。まろがしゐたる人々、あまた集ひゐたり。上よりおるゝ道に、辨の宰相の君の、戸口をさし覗きたれば、晝寝したまへる程なりけり。秋、紫苑、いろ／＼の衣に、濃きこうちぎ上に着て、顔は引き入れて、硯の筥に枕して、臥し給へる額つき、いとらうたげになまめかし。繪に晝きたる物の姫君の心地すれば、口覆を引きやりて、物語の女の心地もし給へるかな」といふに、見上げて、「もの狂ほしの御様や。寝たる人を、心なく驚かすものか」とて、すこし起きあがり給へる顔の、うち赤み給へるなど、細かにをかしようぞ侍りしか。大方もよき人の、折からに、又こよなくまさるわざなりけり。

九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て、「これ、殿の上の、とり分きていとよう、老拭ひ捨て給へと、のたまはせつる」とあれば、

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ

とて、かへし奉らんとする程に、あなたに還りわたらせ給ひぬとあれば、ようなさにとどめつ、

その夜さり、御前に参りたれば、月をかしき程にて、はしに、御簾の下より、裳の裾など、ほころび出づる程に、小少將の君、大納言の君などさぶらひ給ふ。御ひとり、ひと日の黨物とうて、試みさせ給ふ。御前の有様のをかしさ、薫の色、心もとなきなど、口々きこえさするに、例よりも、惱しき御けしきにおはしませは、御加持ども参るかたなり。騒しき心地して入りぬ。人の呼べば、局におりて、しばしと思ひしかど寝にけり。夜中ばかりより騒ぎたちてのゝしる。

十日の、まだほのぼのとするに、御しつらひ變はる。白き御帳に移らせ給ふ。殿よりはじめ奉りて、公達、四位五位ども、おほき騒ぎて、御帳の帷子かけ、御座どももてちがふ程、いと騒がし。日ひとひいと心もとなげに、起き臥し暮させ給ひつ。御物怪どもかりうつし、限なく騒ぎのゝしる。月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず、山々寺々を尋ねて、験者といふ限は、残なく参りつどひ、三世の佛もいかにか聞き給ふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も、耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。御誦經の使、立ち騒ぎ暮し、其の夜も明けぬ。

御帳のひんがし面は、うちの女房参り集ひてさぶらふ。西には、御物のけうつりたる人々、御

屏風一雙をひきつぼね、局口には几帳をたてて、驗者あづかりくのしりゐたり。南には、やんごとなき僧正僧都、貢りゐて、不動尊の、生き給へるかたちをも、呼び出て現はしつべう、頼みみ恨みみ、聲みなかれわたりにたる、いといみじう聞こゆ。北の御障子と、御帳とのはずま、いと狭き程に、四十餘人ぞ、後に數ふれば居たりける。いさゝかみじろぎもせられず、氣あがりて、ものも覺えぬや。今、里より參る人々は、なか／＼居籠められず。裳の裾、衣の袖、ゆくらむかたも知らず、さるべきおとななどは、忍びて泣きまどふ。

十一日の曉に、北の御障子、二間はなちて、廂にうつろひ給ふ。御簾なども、かけあへねば、御几帳をおし重ねておはします。僧正ぎやうてふ、僧都、法務僧都など、さふらひて、加持まり、院源僧都、昨日書かせ給ひし御願書に、いみじき事ども書き加へて、讀みあげ續けたる言の葉のあはれに尊く、頼もしげなる事、限りなきに、殿のうちそへて、佛念じきこえ給ふ程の、頼もしく、さりともとは思ひながら、いみじうかなしきに、人々涙をえ乾しあへず、ゆゝしう、かうなごとかたみに云ひながらぞ、えせきあへざりける。

人げ多くこみては、いとど、御心地もくるしうおはしますらんとて、南東面に、出ださせ

給うて、さるべき限り、この二間ふたまのものにはさぶらふ。殿の上、讀岐よみぎと、宰相の君、くらの命婦、御几帳ごきぢやうの内に、仁和寺の僧都の君、三井寺の内供ないぐの君も、召し入れたり。殿のよろづにのゝしらせ給ふ御擊ごげきに、僧もけたれて、音ねせぬやうなり。今、一座いざにゐたる人々、大納言の君、小少將の君、宮の内侍みやないし、辨の内侍、中務の君、大輔の命婦みやくらぶ、大式部のおもと、殿の宣旨、いと年經としへんたる人々の限りにて、心を惑はしたるけしきどもの、いと理ことわりなるに、まだ見奉り馴るる程ほどなけれど、類たぐひなくいみじと、心ひとつに覺おぼゆ。

また、この後のきには、立てたる几帳の外とに、内侍のかみのめのと、姫君ひめぎみの、少納言のめのと、いと姫君ひめぎみの、小式部のめのとなど、おし入り來て、御帳ごぢやうの二つが後の細道ほそみちを、人もとほらず。行きちがひ、みじろく人々は、その顔かほなども見わかれず。殿とのの君達きみたち、宰相中將さいしやうちやうかねたか、四位少將よんゐしやうまみちなどをば、さらにもいはず、左宰相中將ひだりさいしやうちやう藤房ふじむら、宮の太夫たふなど、例れいはけ遠とほき人々ひとさへ、御几帳ごきぢやうのかみより、ともすれば、のぞきつゝ、腫はれたる目めども見ゆるも、よろづ恥はづれたり。頂いただきには、うちまきを雪ゆきの様に降りかゝり、おししほみたる衣ぎの、いかに見苦みくるしかりけむと、後のちにそをかしき。

御頂の、御髪おろし奉り、御戒言、受けさせ奉り給ふ程、くれ惑ひたる心地に、こはいかなる事と、あさましう悲しきに、たひらかにせさせ給ひて、後の事まだしきほど、さばかり廣き身屋、南の廂、勾欄のほどまで、立ちこみたる僧も俗も、今ひとよりとよみて、額づく。

ひんがしおもてなる人々は、殿上人にまじりたる様にて、小中將の君、左の頭中將に見合せて、あきれたりし様を、後にぞ、人々はいひ出でて笑ふ。けさうなどのたゆみなく、なまめかしき人にて、曉に顔づくりしたりけるを、泣き腫れ、涙にところどころ濡れそこなはれて、淺ましう、其の人となん見えざりし。宰相の君の、顔がはりし給へる様などこそ、いとめづらかに侍りしか。まして、いかなりけん。されど、そのきはに見し人の有様の、互に覺えざりしなむ、かしこかりし。

今とせさせ給ふ程、御もののけの、ねたみのゝしる聲などのむくつけさよ。源の藏人には、心譽阿闍梨、兵衛の藏人には、そうそといふ人、右近藏人には、ほうぢうじの律師、宮の内侍の局には、ちそう阿闍梨を預けたれば、もののけに引き倒されて、いといとほしかりければ、ねんがく阿闍梨を召し加へてそのゝしる。阿闍梨の験の薄きにあらず、御物怪のいみじうこはきなりけ

り。宰相の君をき人に、あひかうをそへたるに、夜一よ、のゝしり明かして、聲もかれにけり。御物怪うつれど、召しいでたる人々も、皆うつらで騒がれけり。

午の時に空暗れて、朝日さし出でたる心地す。たひらかにおはします、嬉しさの類も無きに、男にさへおはしましける悦び、いかがはなのめならむ。昨日しをれ暮し、今朝の程、朝霧におぼはれつる女房など、皆たちあかれつゝやすむ。御前には、うちねびたる人々の、かゝる折ふし、つきつきしきさぶらふ。殿も上も、あなたに渡らせ給うて、月ごろ、御修法讀經にさぶらひ、昨日今日、召しにて参り集ひたる僧の、布施賜ひ、醫師、陰陽師など、道々のしるしあらはれた。藤賜はせ、うちには、御湯殿の儀式など、かねてまうけさせ給ふべし。人の局々には、大きやかなる袋、包ども持てちがひ、唐衣のぬひもの、裳ひき結び、螺鈿ぬひ物、けしからぬまでしてひきかくし、扇もて來ぬかしなど、いひ交しつゝけさうじつくろふ。

例の、渡殿より見やれば、妻戸の前に、宮の太夫、春宮の太夫など、さらぬ上達部も、さぶらひ給ふ。殿、出でさせ給ひて、日頃埋もれつる遺水、つくろはせ給ひ、人々の御けしきども、心地よげなり。心の内に、思ふことあらむ人も、唯今は、紛れぬべき世のけはひなる中にも、宮の

大夫、殊更にも、笑み誇り給はねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる。右の宰相中将は、權中納言とたはふれして、對の簀子に給へり。

内より、御佩刀もて參れる。頭中将頼定、今日伊勢のみてぐらつかひ、かへる程、のぼるまじければ、たちながらぞ、たひらかにおはします御有様、奏せさせ給ふ。祿なども給ひける、その事は見ず。

御臈緒は殿の上、御乳附は橘の三位つき子、御めのと、もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかたとて、大左衛門のおもと仕うまつる。備中守宗時の朝臣のむすめ、藏人の辨の女。

御湯殿は酉の時とか、火ともして、宮のしもべ、みどりの衣の上に、白き當色着て御湯まゐる。その桶すゑたる臺など、皆白き覆したり。尾張守近光、宮のさぶらひのおさなる仲信來て、御簾のもとに參る。御厨子に、きよいこの命婦、播磨、とりつぎてうめつゝ、女房二人、大木工右馬汲みわたして、御瓮十六にあまればいる。薄物の上衣、織の裳、唐衣、釵子さして白きもとゆひしたり。頭つきはえてをかしく見ゆ。御湯殿は、宰相の君、御むかへ湯、大納言の君、源運子、湯卷すがたどもの、例ならず様異にをかしげなり。

宮は、殿抱き奉り給ひて、御佩刀小少將の君、虎の頭、宮の内侍とりて御先に參る。唐衣は松の實の紋、裳は、かいふを織りて、大海のすりめにかたどれり。腰は薄もの、から草を織ひたり。少將の君は、秋の草むら蝶鳥などを、白銀して作り輝かしたり。織物は、限りありて、人の心にしくべいやうなければ、腰ばかりを、例にたがへるなめり。殿の公達ふたところ、源少將まさみちなど、うちまきをなげのゝしり、我れたかう打ちならさんと争ひ騒ぐ。へんちじの僧都護身にさぶらひ給ふ。頭にも目にも、當るべければ、扇を捧げて、若き人々に笑はる。文よむ博士、藏人辨廣業、勾欄のもとに立ちて、史記の一卷を讀む。弦うち廿人、五位十人、六位十人、二並に立ちわたれり。

夜さりの御湯殿とても、様ばかりしきりて參る。儀式同じ。御文の博士ばかりやかははりけん。伊勢守致時の博士とか。例の孝經なるべし。又擧周は、史記文帝の卷をぞ讀むなるべし。

七日の程かはるがはる、よろづの物の曇なく、白きおまへに、人のやうだい、色あひなどさへ、けちえんに現れたるを見わたすに、よき墨繪に、髪どもをおほしたるやうに見ゆ。いとどものはしたなくて、輝かしき心地すれば、晝はをさ／＼さしいです、のどやかにて、東の對の局より、

まうのぼる人々を見れば、色許されたるは、織物の唐衣同じ袷ともなれば、なか／＼醒めて、心々も見えず。ゆるされぬ人も、少しおとなびたるは、かたはらいたかるべき事はせて、唯えならぬ三重五重の袷に、上衣は織物、無紋の唐衣、すくよかにして、重ねには綾薄物をしたる人も、扇などみめには、おどろ／＼しくかがやかさで、由なからぬ様にしたり。心ばへある本文うち書きなどして、云ひ合せたるやうなるも、心々と思ひしかども、齡の程、同じどちのは、をかした見かはしたり。人の心の、思ひおくれぬけしきぞ、顯著に見えける。裳、唐衣の織物をば、さるものにて、袖口に、置口をし、裳の繡目に、白がさねの絲をふせて、みのやうにし、箔を飾りて、綾の紋にすゑ、扇どもの様などは、ただ、雪深き山を、月のあかきに、見渡したる心地しつゝ、きら／＼と、そこはかと思わたされず、鏡をかけたるやうなり。

三日にならせ給ふ夜は、宮づかさ、太夫よりはじめて、御産養つかうまつる。右衛門のかみは、お前の事、沈の懸盤白がねの御皿など、詳くは見ず。源中納言藤宰相は、御衣御襦袢、衣篋の折立、入帷子、包覆、下机など、同じもの、同じ白さなれど、しざま、人の心々見えつゝしつくしたり。近江守たかまさは、大かたの事どもや、仕うまつらん。ひんがしの對の、西の廂は上講

部の座、北をかみにて二行に、南の廂に殿上人の座は西を上なり。白き綾の御屏風どもを、身屋の御簾にそへて外さまに立てわたしたり。

式 樂
五日の夜は、殿の御産養。十五日の月、曇なくおもしろきに、池のみぎは近う、かがり火どもを木の下にともしつゝ、屯食どもたてわたす。あやしき賤男の、さへづり歩くけしきどもまで、色ふしに立ちがほなり。殿守が、立ちわたれるけはひも怠らず、晝のやうなるに、こゝかしこの岩がくれ木のもと毎に、うち群れてをる上達部隨身などやうの者どもさへ、おのがじし語らふべかめることは、かゝる世の中の光の出でおはしましたる事を、蔭にいつしかと思ひしも、及び顔にこそ。そぞろにうち笑み、心地よげなるや。まして殿の内人は、何ばかりの、數にしもあらぬ五位どもなども、そこはかたなく腰もかがめて行きちがひ、いそがしげなる様して、時にあひ顔なり。

23
おもものまゐるとて、女房八人、ひとつ色にさうぞきて、髪あげ、白き元結して、白き御盤もて續き参る。今宵の御まかなひは宮の内侍、いとものくしく、あざやかなるやうだいに、元結はえしたる、髪のがりば、常よりもあらまほしき様して、扇にはづれたるかたはらめなど、いと

清らに侍りしかな。髪あげたる女房は、源式部の加賀のかみ景、小左衛門、故備中のかみ、小兵衛、左京のかみ、あ

大輔、伊勢の祭主、大うま、左衛門大夫、小うま、左衛門のすけ、小兵部、藏人なりちか、小木工、いひけん人のむすめ

かたちなどをかきし若人の限りにて、さし向ひつゝ、あわたりたりしは、いと、見る甲斐こそ侍り

しか。例はおもの参るとて、髪あぐることをこそするを、かゝる折とてさりぬべき人々を、えら

せ給へりしを、心憂し、いみじと、愁へ歎きなど、ゆゝしきまでぞ見侍りし。御帳のひんがしお

もて、二間ばかりに、三十餘人なみたりし、人々のけはひこそ見ものなりしか。つぎの御膳は、

采女どもまゐる。戸口のかたに、御湯殿の隔の御屏風に重ねて、又南向に立てて、白き御厨子一

雙、まゐりすゑたり。

夜更くるまゝに、月の隈なきに、采女どもひとり、み髪あげども、殿司、掃司の女官、顔も知

らぬをり。園司などやうのものにやあらん、おろそかにさうぞきけさうじつゝ、おどろの釵子、

おほやけくしきさまして、寢殿のひんがしの、渡殿の戸口まで、隙もなくおしこみてゐたれば、

人もえ通りかよはず。おものまゐりはてて、女房御簾のもとに出でるたり。火影にきら／＼と見

えわたる中にも、大式部のおもとの裳唐衣、小鹽の山の小松原を繕ひたるさまいとをかし。大式

部は、陸奥守のむすめ、殿の官旨よ。太夫の命婦は、唐衣は手もふれず、裳を白がねの泥して、いと鮮に大海にすりたるこそ、搦焉ならぬものから、めやすけれ。辨の内侍の裳に、白がねのぬひものも、松が枝の齡を、あらそはせたる心ばへかどくし。少將のおもとの、これらには劣りなる、しろがねの箔を、ひとびとつきじろふ。少將のおもとといふは、信濃守すけみつが妹、殿のふる人なり。その夜の、御前の有様の、いと、人に見せまほしければ、夜居の僧のさぶらふ御屏風をおしあけて、「この世には、かうめでたきこと、まだ、え見給はじ」と、いひ侍りしかば、あなかしこくと、本尊をばおきて、手をおし擦りてぞ喜び侍りし。

上達部、座を立ちて、御階の上に参り給ふ。殿をはじめ奉りて暮うち給ふ。かみのあらそひ、いとまさなし。歌どもあり。「女盃」などある折、いかがはいふべきなど、くちぐち思ひこころみる。

めづらしき光さし添ふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ

四條の大納言にさしいてむほど、歌をばさるものにて、つかひよういひのべじなど、さざめき手ふ程に、こと多くて、夜いたう更けぬればにや。とりわきても指さでまかて給ふ。藤ども、上

達部には、女の装束に、御衣、御襦袢や添ひたらん。殿上の四位は、袷一かさね、六位は、袴一具ぞ見えし。

又の夜、月いとおもしろく、頃さへをかしきに、若き人は、舟に乗りて遊ぶ。色々なる折よりも、同じ様に装束きたるやうだい、かみの程、曇なく見ゆ。小大輔、源式部、宮木の侍従、五節の辨、左近、小兵衛、小衛門、うま、やすらひ、いせ人など、はし近く居たるを、左の宰相中將殿、中將の君、誘ひいで給ひて、右の宰相中將兼隆に、棹ささせて、舟に乗せ給ふ。かたへは、すべりとどまりて、さすがにうらやましくやあらむ、と見出だしつゝゐたり。いと面白き庭に、月の光りあひたるやうだいかたちも、をかき様なる。北の陣に車あまたありといふは、うへ人どもなりける。藤三位をはじめにて、侍従命婦、藤少將命婦、うまの命婦、などぞ聞え侍りし。詳しくは見知らぬ人々なれば、辟事も侍らんかし。舟の人々も惑ひ入りぬ。殿、いて給ひて、おぼすことなき御けしきに、もてにやしたはぶれ給ふ。贈物ども、品々に給ふ。

藏人少將道雅を御使にて、物の數々書きたる文、柳篋に入れて参れり。やがて返し給ふ。勸學院衆ども、あゆみして参れる、見参の文ども又啓す。返し給ふ。祿ども給ふべし。今宵の儀式は、

殊にまさりて、おどろくしくのゝしる。御帳の内を覗き参りたれば、かく國の親ともて騒がれ給ひ、麗しき御けしきにも、見えさせ給はず、少しうち惱み、面搜せて、おほとのごもれる御有様、常よりもあえかに、若く美しげなり。ちひさき燈爐を、御帳の内にかけてれば隈もなきに、いとどしき御色合の、そこひも知らずきよなるに、こちたき御ぐしは、結びてまさらせ給ふわざなりけりと思ふ。かけまくもいとさらなれば、えぞ書き續け侍らぬ。大方の事どもは、一日の同じこと、上達部の祿は、御簾のうちより、女装束、宮の御衣など添へて出だす。殿上人、頭二人をはじめて、よりつゝとる。おほやけの祿は、大袷、衾、腰差など、例の公ざまなるべし。御乳附仕うまつりし橋の三位の贈り物、例の女の装束に、織物の細長添へて、白がねの衣篋、包なども、やがて白きにや。又包みたる物、添へてなどぞ聞き侍りし。詳しくは見侍らず。

八日。人々、色々さうぞきかへたり。

九日の夜は、春宮權太夫つかうまつり給ふ。白き御厨子ひとよろひに、まゐりすゑたり。こきいと様異に今めかし。白がねの御衣篋、海浦をうち出でて、蓬菜など例のことなれど、今めかしう細かにをかしきを、とり放ちては、まねび盡すべきにもあらぬこそわろけれ。今宵は、おもて

朽木がきの几帳、例の様にて、人々は、濃きうち物を、上に着たり。めづらしく心にくくなまめいて見ゆ。好きたる唐衣どもに、つやくとおしわたして見えたる、また、人の姿も、さやかにぞ見えなされける。こまのおもといふ人の、恥見侍りし夜なり。

十月十餘日まで、御帳出てさせ給はず。西の傍なる御座に、夜も晝もさぶらふ。殿の、夜中にも曉にも、参り給ひつゝ、御めのとの懐をひき捜させ給ふに、うちとけて寝たる時などは、心もなくおぼえられておどろくも、いといとほしく見ゆ。心もとなき御程を、わが心をやりてささげうつくしみ給ふも、ことわりにめでたし。あるときはわりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて、御几帳の後にて、あぶらせ給ふ。「あはれ、この宮の御しとに濡るゝは、嬉きわざかな。この濡れたるあぶるこそ、思ふやうなる心地すれ」と、喜ばせ給ふ。

中務の宮わたりの御事を、御心に入れて、そなたの心よせ有る人とおぼして、かたらはせ給ふも、まことに、心の中には思ひ居たること多かり。

行幸近くなりぬとて、殿の内を、いよく磨かせ給ふ。世にもおもしろき菊の根を、尋ねつゝ、掘りて参る。色々うつろひたるも、黄なるが見所あるも、様々に植ゑたてたるも、朝霧の絶え間

に、見わたしたるは、げに老いもしぞきぬべき心地するに、なぞや。まして、思ふことの、少しもなのめなる身ならましかば、すぎずきしくも、もてなし着やぎて、常なき世をも過ぐしてましましてたきこと、おもしろき事を見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、もの憂く、思はずに歎かしき事のまさるぞ、いと苦しき。いかで今はなほ、もの忘れしなん、思ひ出もなし。罪も深かりなど、あけたてばうちながめて、水鳥どもの、思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見む我れも浮きたる世を過ぐしつゝ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかりなんと、思ひよそへらる。

小少將の君の、文おこせたる返り事書くに、時雨のさとかきくれば、使も急ぐ。「又空の景色も、うち騒ぎてなん」とて、腰折れたることや、書き交ぜたりけん。暗うなりにたるに、たかへり、いたう霞めたる濃染紙に、

雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なるらむ

書きつらんこともおもほえず。

ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞ乾く間もなき

その日、新しく造られたる船ども、さし寄せさせて御覽す。龍頭鷁首の、生ける形、思ひやられて、あざやかに麗し。行幸、辰の時と、まだ曉より、人々けさうじ心つかひす。上達部の御座は、西の對なれば、こなたは例のやうに騒しうもあらず。内侍のかんの殿の御かたに、中々人々の裝束なども、いみじう整へ給ふと聞こゆ。曉に少將の君参り給へり。諸共に、頭げぶりなどす。例の、さいふとも日たけなむと、たゆき心どもはたゆたひて、扇のいとなほくしきを、また人に云ひたる、持て來なんと待ちゐたるに、鼓の音を聞きつけて、急ぎ参る、さまあしき。御輿迎へ奉る、船樂いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁の、さる身の程ながら、階より上りて、いと苦しげに、うつぶし臥せる、なにの、ことごとなる、高きまじらひも、身の程限りあるに、いとやすげなしかしと見る。

御帳の西面に、御座をしつらひて、南の廂の、ひんがしの間に、御椅子を立てたる。それより一間隔てて、ひんがしにはれたるきはに、北南のつまに、御簾をかけ隔てて、女房のゐたる、南の柱もとより、すだれをすこし引きあげて、内侍二人出づ。その日の髪あげ、うるはしき姿、唐

繪を、をかしげに畫きたるやりなり。左衛門の内侍御佩刀とる。青色の無紋の唐衣、裾濃の裳、領巾裙帯は、浮線綾を、襷綾に染めたり。上衣は、菊の五重、播練は紅、姿つきもてなし、いささかはづれて見ゆるかたははらめ。花やかに清げなり。葡萄染の織物の袷、裳唐衣は、さきの同じこと。いとさゝやかに、をかしげなる人の、つゝましげに、少し包みたるぞ、心苦しう見えける。扇よりはじめて、好みましたりと見ゆ。領巾は、棟綾、夢の様にも今宵のたつ程、よそほひ、昔天降りけむ乙女子の姿も、かくやありけんとまでおほゆ。近衛司、いとつきづきしき姿して、御興の事共おこなふ、いときらきらし。頭中將、御佩刀など執りて、内侍につたふ。

御簾の中を見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の青色赤色の唐衣に、地摺の裳、上着は、おしわたして、蘇枋の織物なり。ただうまの中將ぞ、葡萄染を着て侍りし。打衣どもは、濃き薄き紅葉を、こきませたるやうにて、中なる衣ども、例のくちなしの、濃き薄き、紫苑色、うら青き菊を、もしは、三重など心々なり。綾ゆるされぬは例のおとなしくしきは、無紋の青色、もしは、蘇枋など、みな五重にて、襷どもは皆綾なり。大海の摺裳の、水の色華やかに、あざくとして、腰どもは、固紋をぞ、多くはしたる。袷は、菊の三重五重にて、織物はせず。若き人は、

菊の五重の唐衣を、心々にしたり。上は白く、青きがうへをば蘇枋、單衣は青きもあり。上薄蘇枋、つぎ濃き蘇枋、中に白きませたるも、すべて、しさまをかきのみぞ、かどくしく見ゆる。いひ知らずめづらしく、おどろくしき扇とも見ゆ。

うち解けたる折こそ、まほならぬ形も、うちまじりて見えわかれけれ。心を盡してつくるひけさうじ、劣らじとしたてたる、女繪のをかしきにいとよう似て、年の程のおとなび、いと若きけぢめ、髪のおしおとろへたるけしき。又盛りのこちたきが、我が前ばかり見渡さる。さては扇よりかみの類つきぞ、あやしく人のかたちを品々しくも、下りても、もてなす所なんめる。かゝる中にすぐれたると見ゆるこそ、限り無きならめ。かねてよりうへの女房、宮にかけてさぶらふ五人は、参り集ひてさぶらふ。内侍二人、命婦二人、御まかなひの人ひとり。

おもの参るとて、筑前、左京ひともの髪あげて、内侍の出で入るすみの柱もとより出づ。是はよろしき天女なり。左京は青色に柳の無紋の唐衣、筑前は菊の五重の唐衣、裳は例の摺り裳なり。御まかなひは橘の三位、青色の唐衣唐綾の黄なる菊の桂ぞ、上衣なんめる。一もとあけたり、柱がくれにて、まほにも見えず。殿、若宮いたき奉り給ひて、御前に出で奉り給ふ。うへ抱きう

つし奉らせ給ふ程、いさゝか泣かせ給ふ御聲いと若し。辨の宰相の君御佩刀とりて参り給へり。身屋の中戸より西に、殿のうへおはする方にぞ、若宮はおはしまさせ給ふ。うへ外に出てさせ給ひてぞ、宰相の君はこなたに歸りて、「いと顯證に、はしたなき心地しつる」と、げに面うちあかみてあ給へる顔、細かにをかしげなり。衣の色も、人よりけに著はやし給へり。

暮れ行くまゝに樂どもいとおもしろし。上達部は御前に候ひ給ふ。萬歳樂、太平樂、賀殿樂などいふ舞ども、長慶子を退出音聲にあそびて、山のさきの道を舞ふ程、遠くなり行くまゝに、笛の音も鼓の音も松風も、木深く吹き合せていとおもしろし。

いとよく拂はれたる遺水の、心ゆきたるけしきして、池の水浪立ち騒ぎ、そぞろ寒きに、うへの御相唯二つ奉り給へり。左京の命婦の、己が寒かめるまゝに、いとほしがり聞えさするを、人々はしのびて笑ふ。筑前の命婦は、古院のおはしましし時、此の殿の行幸はいと度々ありしことなり、其の折かの折など思ひ出でて云ふを、ゆゝしきことも有りぬべかめれば、煩はしとて、こにあへしらはず、几帳隔ててあるなめり。「あはれいかなりけむ」などだにいふ人あらば、うちこぼしつべかめり。

御前のみあそび始りていとおもしろきに、若宮の聲うつくしうきこえ給ふ。右の大臣、「萬歳樂御聲に合ひてなん聞ゆる」と、もてはやしきこえたまふ。左衛門の督など「萬歳樂千秋樂」と、諸聲に誦して、あるじのおほい殿、「あはれさきさき行幸を、などて面目ありと思ひ給ひけむ。かゝりける事も侍りけるものを」と、酔ひ泣きし給ふ。さらなる事なれど、御目もおぼしたるこそ、いとめてたけれ。

樂 式 郡 日 記

殿はあなたに出でさせ給ふ。うへは入らせ給ひて、右の大臣を御前に召して、筆とりて書き給ふ。宮司、殿の家司のさるべき限り加階す。頭辨して案内は奏させ給ふめり。新しき宮の御よろこびに、氏の上達部引き連れて拜し奉り給ふ。藤原ながら門わかれたるは、列にも立たざりけり。次に別當になりたる右衛門の督、大宮の太夫、宮のすけ、加階したる侍従宰相、つぎ／＼の人舞踏す。宮の御方に入らせ給ひて程もなきに、夜いたる更けぬ。御輿寄すとのゝしれば出でさせ給ひぬ。

又のあしたに、内の御使朝霧もはれぬに参れり。うちやすみ過して見ずなりにけり。けふぞ始めてそい奉らせ給ふ。殊更に行幸の後とて。

又の日宮の家司、別當、おもと人など、職定まりけり。かねても聞かて、ねたき事多かり。日ごろの御しつらひ例ならずやつれたりしを、あらたまりて、御前の有様いとあらまほし。年來心もとなく見奉りたまひける御事のうち合ひて、あけたてば、殿もうへも参り給ひつゝ、もてかしづき聞え給ふにほひいと心ことなり。

暮れて月いとおもしろきに、宮の太夫女房にあひて、とりわきたる慶ひも啓せさせむとにやあらむ。妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、此の渡殿の東の妻なる、宮の内侍の局に立ち寄りて、「こゝにや」と案内し給ふ。宰相は中の間によりて、まだささぬ格子のかみ押し上げて、「おはすや」などあれど、出てぬに、太夫の「こゝにや」とのたまふにさへ、聞きしのばんもことごとしき様なれば、はかなきいらへなどす。いと思ふ事なげなる御氣色どもなり。我が御いらへほせず、太夫を心ことにもてなしきこゆ、ことわりながらわろし。かゝる所に、上臈のけぢめ、いたうは別くものか」とあばめ給ふ。「けふのたふとさ」など聲をかしう歌ふ。夜更くるまゝに月いとあかし。格子のもと取りさげよ」とせめ給へど、いと下りて上達部の居給はんも、所といひながらかたはらいたし。若やかなる人こそ、物の程知らぬ様に、あだへたる

も罪ゆるさる。何かあざればましと思へば放たず。

御五十日は霜月の朔日の日、例の人々のしたてのぼり集ひたる、御前の有様、繪に畫きたる物合の所にぞ、いとよう似て侍りし。御帳の東の御座のきには、御几帳を奥の御障子より廂の柱まで、ひまもあらせず立てきりて、南面に御前の物は参りすゑたり。西によりて大宮のおもの、例の沈のをしきなり、何くれの臺なりけんかし。そなたの事は見ず。御まかなひ宰相の君、讃岐とりつぐ。女房も釵子元結などしたり。若宮の御まかなひは、大納言の君、ひんがしによりて参りすゑたり。小き御臺、御皿ども、御箸の臺、洲濱なども、ひくな遊びの具と見ゆ。

記 日 部 式 紫

それより東の間の、廂の御簾すこし上げて、辨の内侍、中務の命婦、小中將の君など、さべい限りぞ取り次ぎつゝまゐる。奥にみて詳しうは見侍らず。今宵少輔のめのと色ゆるさる。こごしき様うちしたり。宮抱き奉れり。御帳のうちにて、殿のうへ抱きうつし奉り給ひて、ゐざり出てさせ給へり。火影の御様けはひ殊にめてたし。赤色の唐の御衣、地摺の御裳、麗くさうぞき給へるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。大宮は葡萄染の五重の御衣、蘇芳の御小桂奉れり。

殿、餅はまゐり給ふ。上達部の座は、例の東の對の西おもてなり。いま二所の大宮も参り給へ

り。はしの上に参りてまた酔ひ亂れてのゝしり給ふ。折櫃物、籠物どもなど、殿の御方より、まうち公達取り次ぎてまゐれる、勾欄につづけてすゑわたしたり。炬火のひかりの心もとなければ、四位の少将などを呼びよせて、脂燭ささせて人々を見る。内の臺盤所にもてまゐるべき、明日よりは御物忌として、今宵皆急ぎてとり拂ひつゝ、宮の大夫御簾のもとに参りて、上達部御前かみだつべのりまへに召さんと啓し給ふ。きこしめしつとあれば、殿より始め奉りて皆参り給ふ。はしの東の妻戸の前まで居給へり。女房二重三重つづるわたされたり。御簾どもを、其の間にあたりてゐたまへる人々、よりつゝ巻き上げ給ふ。大納言の君、宰相の君、小少將の君、宮の内侍と居給へり。

右の大臣よりて、御几帳のほころび引きたち亂れ給ふ。さだすぎたりとつきじろふも知らず、扇をとり、たはぶれごとのはしたなきも多かり。太夫かはらけ取りて、そなたに出て給へり。篋山歌かやまかひて、御遊あそびさまばかりなれどいとおもしろし。其の次の間の、ひんがしの柱もとに、右大將よりて、衣の袂袖口數へ給へるけしき、人よりことなり。酔ひのまぎれをあなづりきこえ、又たれかとはなど思ひ侍りて、はかなき事もいふに、いみじくされ今めく人よりも、けにこそおはすべかめれ。しか盃の順の來るを、大將はおち給へど、例のことならひの千とせ萬代にて過ぎぬ。

左衛門の督「あなかしこ此のわたりに、若紫やさぶらふ」と覗ひ給ふ。源氏にかかるべき人も見え給はぬに、彼の上は、まいていかで、ものし給はん。と聞きあたり。三位のすけかはらけとれ」などあるに、侍従宰相立ちて、内の大臣のおはすれば、下より出でたるを見て、大臣酔ひ泣きし給ふ。權中納言すみの間の柱もとによりて、兵部のおもとひこじろひ、聞きにくき戯れごととも殿のたまはず。

恐しかるべき夜の御多ひなめりと見て、事はつるまゝに、宰相の君にいひあはせて、隠れなんとするに、東おもてに殿の公達、宰相中將など入りて、騒しければ、二人御帳の後に居隠れたるを、取り拂はせ給ひて、二人ながら捕へすゑさせ給へり。和歌一つ宛仕うまつれ、さらばゆるさむ」とのたまはず。いとほしく恐ろしければきこゆ。

いかにいかが數へやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせ給ひて、いと疾うのたまはせたる。

あしたつの齡しあれば君が代の千年の數もかぞへ取りてむ

さばかり酔ひ給へる御心にも、おぼしけることの様なれば、いとあはれにことわりなり。げに

かくもてはやし聞え給ふにこそは、よろづの飾りもまさらせ給ふめれ。千代もあえまほしく、御行く末の、數ならぬ心地にだに思ひ續けらる。

「宮の御前きこしめすや、仕うまつれり」と、我ればめし給ひて「宮の御てゝにて鷹わろからず、鷹がむすめにて、宮わろくおはしますさず。母も亦幸ひのありと想ひて、笑ひ給ふめり。よい男は持たかりかしと想ひためり」と、戯れ聞え給ふも、こよ無き御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さることもなければ、驛がしき心地はしながら、めでたくのみ聞きぬさせ給ふ。殿の上聞きにくしとおほすにや、渡らせ給ひぬるけしきなれば、「送りせずとて、母恨み給はむものぞ」とて、急ぎ御帳の内を通らせ給ふ。「宮なめしとおほすらん。親のあればこそ子もかしこけれ」とうちつぶやきたまふを人々笑ひきこゆ。

入らせ給ふべき事も近うなりぬれど、人々はうちつぎつゝ心のどかならぬに、御前には、御草子作り營ませ給ふとて、明けたてば、まづ向ひ侍ひて、色々の紙選り整へて、物語の本ども添へつゝ、所々に文書き配る、且は綴ち集めしたゝむるを役にて、明し暮す。「何のこもちがつめたきに、かかるわざはせさせ給ふ」ときこえ給ふものから、良き薄様ども、筆墨などもてまゐり給ひ

つゝ、御観を借しみのゝしりて、ものの隈にむかひさぶらひて、かゝるわざし出づと、さいなむれど、よきつき墨筆など給はせたり。局に物語の本ども、とりに遣りてかくしおきたるを、御前にある程にやをらおはしまいて、あさらせ給ひて、皆内侍のかんの殿に、奉り給ひてけり。よろしう書きかへたりしは、皆ひき失ひて、心もとなき名をぞ、とり侍りけんかし。

若宮は、御物語など、せさせ給ふうちに、心もとなくおぼしめす、ことわりなりかし。

御前の池に、水鳥どもの、多くなりゆくを見つゝ、はらはせ給はぬ先に雪降らなん、この御前の有様、いかにをかしからんと思ふに、あからさまにまかてたるほど、二日ばかりありてしも雪は降るものか。見所もなきふる里の木立を見るにも、ものむづかしう思ひ亂れて、年來、つれづれにながめあかし暮しつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋に行き交ふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時來にけりとばかり、思ひわきつゝ、「いかにやいかに」とばかり、行末の心細さは、やる方なきものから、はかなき物語などにつけて、うち語らふ人同じ心なるは、あはれに書き交し、少しけ遠きたよりどもを、尋ねてもいひけるを、ただこれを様々にあへしらひ、そぞろごとに、つれづれをば慰めつゝ、世にあるべき人数とは思はずながら、さしあたりて、恥かし、いみ

じと思ひしるかたばかり、のがれたりしを、さも残せる事なく、思ひ知る身の憂さかな。

試みに、物語をとりて見れど、見し様にも覺えず、あさましく、あはれなりし人の、かたらし邊も、我れをいかにおもなく、心淺き者とや思ひ落すらんと、推し量るに、それさへいとはづかしくて、えおとづれやらす。心憎からんと思ひたる人は、おほぞうにては、文や散らすらなど、疑はるべかめれば、いかでかは、我が心のうちあるさまをも、深う推し量らんと、ことわりにて、いとあいなければ、申絶ゆとなけれど、おのづから、かき絶ゆるもあまた住み定まらずなりにたりとも、思ひやりつゝ、音なひくる人も、難うなどしつゝ、すべて、はかなき事にふれても、あらぬ世に來たる心地ぞ、こゝにてしもうちまさり、ものあはれなりける。

紫式部日記

ただえさらずうち語らひ、すこしも心とめて思ふ、細やかにもをいひ通ふ、さしあたりて、おのづからむつび語らふ人ばかり、少しなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。大納言の君の、よる／＼は御前にいと近うふし給ひつゝ、物語し給ひしけはひの戀しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

41 うきねせし水の上のみ戀しくて鴨の上毛にさえぞおとらぬ

返し

うちはらふ友なきころの寢覺めにはつがひしをしぞ夜半に戀しき

書様などさへいとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。

雪を御覽じて、折しもまかでたる事をなん、いみじく憎ませ給ふと、人々ものたまへり。殿のうへの御消息には、「鷹がとめしたびなれば、殊更に急ぎまかでて、疾く参らんとありしも空事にて、程經るなめり。」とのたまはせられたれば、戯にても、さ聞えさせ給はせしことなれば、かたじけなくて参りぬ。

いらせ給ふは 十七日なり。戌の時などききつれど やうく夜更けぬ。皆、髪あげつゝゐたる人、三十餘人、その外にも見えわかず。身屋のひんがしおもて、東の廂に、うちの女房も十餘人、南の廂の妻戸隔ててゐたり。御輿には、宮の宣旨、絲毛の御車に、殿のうへ、少輔の乳母、若宮抱き奉りて乗る。大納言、宰相の君こがねづくりに、次の車に、小少將、宮の内侍。次に、馬の中將と乗りたるを、わろき人と乗りたりと思ひたりしこそ、あなことごとしと、いとどかゝる有様、むづかしう思ひ侍りしか。殿もりの侍従の君、辨の内侍、次に、左衛門の内侍、殿の宣

旨、式部とまでは、次第知りて、つぎ／＼は、例の、心々にて乗りける。月の隈なきに、いみじのわざやと思ひつゝ、足を空なり。馬の中將の君を、先にたてたれば、行方も知らず、たど／＼しき様こそ、我が後を見る人、恥かしくも思ひ知らるれ。

細殿の三の口に入りて、臥したれば、小少將の君もおはして、なほ、かゝる有様の憂きことを、語らひつゝ、すくみたる衣どもおしやり、厚肥えたる着重ねて、火取に火をかき入れて、身も冷えにけるものの、はしたなさをいふに、侍従の宰相、左の宰相、中將、公信の中將など、次々に、よりつゝとぶらふも、いとなか／＼なり。今宵は、なきものと思はれて、やみなばやと思ふも、人に問ひきき給へるなるべし。いと晨に参り侍らん、今宵は堪へ難く、身もすくみて侍り。など、ことかなしびつゝ、こなたの陣のかたより出つ。おのがじし、家路と急ぐも、何ばかりの人にはと思ひおくらる。わが身によせては侍らず。大かたの世の有様、小少將の君の、いとあてに、をかしげにて、世を憂しと思ひしみて給へるを、見侍るなり。父君よりこと始りて、人の程よりは、幸のこよなくおくれ給へるなんめりかし。

よべの御贈物、今朝ぞ細かに御覽する。御櫛の篋のうちの具ども、いひつくし見やらん方もな

し。手筈一雙、片つかたには、白き色紙、作りたる御草子ども、古今、後撰集、拾遺集、その部どもは、五帖に作りつゝ、侍従の中納言、延幹と、おのゝ草子ひとつに、四卷をあてつゝ、書かせ給へり。表紙は羅、紐、同じからの組、かけごのうへに入れたり。下には、能宣、元輔やうの、古今の歌よみどもの、家々の集書きたり。延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これほただけ近うもてつかはせ給ふべき、見知らぬものどもにしるさせ給へる、今めかしう様異なり。

寛弘五年

左大臣 法成寺殿 道長公

右大臣顯光

内大臣公季 左大將

大納言道綱 傳

權大納言實資 右大將按察使

大納言懷忠 民部卿

記 日 部 式 榮

權中納言齊信 中宮太夫右衛門督十月十六日 正二位

中納言公任 皇太后太夫左衛門督

中納言時光 禮正尹

權中納言隆家

權中納言俊賢 治部卿中宮太夫十月從二位

權中納言中輔 兵部卿

參議有國 勸解出馬官攝摩羅守

行成 左大辨侍 皇太后宮權太夫

懷平 春宮太夫左兵衛督伊豫權守

輔正 式部大輔八十五

兼隆 右近中將

正光 大藏卿

經房 左近中將近江權守

實成 右近中將侍從

前師伊周 准大臣給封戸

正三位頼通 春宮權太夫

從三位兼定 右兵衛督

藏人頭左中辨通方

左中將頼定

左中將經房

少將重尹

兼綱 忠經

頼宗 公信

教通 濟政

源雅通 道政

五節は、二十日にまゐる。侍從宰相に、まひ姫の裝飾などつかはず。右の宰相中將の五節に、襲申うわすされたる、つかはずついでに、筥はこ一雙いっさうに靈物たまもの入れて、心葉こころは、梅うめの枝えだをさして、いと見えきたり。遽はなにいとなむ。常つねの年としよりも、いとみましたる聞きえあれば、ひんがしのおまへの、むかひなる立たにじにみ、隙ひまもなくうちわたしつゝ、ともしたる火ひの光ひかり、晝ひるよりもはしたなげなるに、歩あゆみ入いる様さまども、あさましうつれなのわざやとのみ思おもへど、人ひとの上うえとのみ覺おぼえず。ただかう、殿上人とのうぢの、ひたおもてにさし向むかひ、脂し燭そくさしぬばかりぞかし。屏へい幔まんひきおひやるとすれど、大方おほのけしきは、同じごとぞ見るらんと、思おもひ出いづるも、先まづ胸むねふたがる。

業遠なりたの朝臣あそのよしづき、錦にしきの唐衣かぢ、暗くらの夜よにも、ものに紛まれずめづらしう見ゆ。きぬがら、みじろぎもたをやかならずぞ見ゆる。殿上人とのうぢ、心こころにかしづく。こなたに、うへもわたらせ給たまひて御覽ごらんす。殿とのも忍しのびて、遺戸やうどより北きたにおはしませば、心こころに任せたらざるさし。申清まかのは、たけども等ひとしく整ととのひ、いとみやびやかに心こころにくきけはひ、人ひとにおとらずと定さだめらる。右の宰相中將すけのあるべき限かぎりはみなしたり、樋洗ひぎのふた整ととのひたるさまぞ、さとびたりと人ひとはゝゑむなりし。はてに、藤宰相ふじの思おもひなしに、今いまめかしく心こころとなり。かしづき十人あり。又また麻あの御簾ごしずおろして、こ

ぼれ出でたる衣の褌ども、したり顔に思へる様どもよりは、見どころまさりて火影に見えわたさる。

とがりの日のあした、殿上人まゐる。常のことなれど、月ごろにさとびけるにや、若人たらの珍らしと思へるけしきなり。さるは、摺れる衣も見えずかし。其の夜さり、春宮の亮召して靈物給ふ。おほきやかなる筥ふたつに、高う入れさせ給へり。尾張へは、殿のうへぞつかはしける。

其の夜は御前のこゝろみとか、うへに渡らせ給うて御覽す。若宮おはしませばうち聞きのしる。つねにことなる心地す。

紫式部日記

もの憂ければ、しばしやすらひ、有様にしたがひてまゐらんと思ひてゐたるに、小兵衛、小兵部なども、炭糶にゐて、「いと狭げければ、はかばかしう物も見え侍らず」などいふほどに、殿おはしまして、「などてかうてすぐしてほゐたる。いざ諸共に」とせめたてさせ給ひて、心にもあらずまうのぼりたり。舞臺どもの、いかに苦しからむと見ゆるに、尾張守のぞ、心地あしがりていぬる夢の様に見ゆるものかな。ことはてて下りさせ給ひぬ。この頃の公達は、ただ五節所のをかしき事を語る。「簾のはし、帽額さへ、心々にかはりて、出て居たる頭つき、もてなしけは

ひなどさへ更に通はず、さまざまになんある」と聞きにくく語る。

かゝらぬ年だに、御覽の日の童の心地どもは、おろかならざるものを、ましていかならんなど、心もとなくゆかしきに、歩み並びつゝ、出て來たるは、あいなく胸つぶれて、いとほしくこそあれ。さるは、とりわきて深う心よすべきあたりもなしかし。我れも我れもと、さばかり人の思ひて、さし出でたることなればにや、目うつりつゝ、劣り勝り、げざやかにも見えわかず。今めかしき人の目にこそ、ふと物のけぢめも見とるべかめれ。ただかくもりなき晝中に、扇もはかばかしく持たせず、そこらの公達の立ちまじりたるに、さてもありぬべき身の程、心もちゑと云ひながら、人に劣らじとあらそふ心地も、いかに臆すらんと、あいなくかたはらいたきぞ、かたくなしきや。

丹波守の童の、青い白橡の汗衫、をかしと思ひたるに、藤宰相の童は、赤色を着せて、下仕の唐衣に青色をおしかへしきたる、ねたげなり。童のかたちも、一人はいとまほには見えず。宰相の中將は、童いとそびやかに、髪どもをかし。皆濃き袖に、上衣は心々なり。汗衫は五重なる中に、尾張は唯葡萄葉を着せたり。中々、ゆゑしく心ある様して、物の色合、色澤などいと

すぐれたる、扇あふぎとるとて、六位の藏人くらひどもよるに、心こころと投げやるこそ、やさしきものから、女にはあらぬかと思ゆれ。我等われらを彼かれがやうにて、出いてゐよとあらば、又またしてもさまよひ歩ありくばかりにぞかし、かうまで立たち出いてんとは、思おもひかけきは。されど、目めに見す／＼あさましきものは、人の心こころなり。されば、今いまより後の面おもてなさは、ただ馴なれに馴なれすぎ、ひたおもてならんも、やすしかしと、身みの有様ありさまの夢ゆめの様ように思おもひ續つづけられて、あるまじき事ことにさへ思おもはる。かゝりて、ゆゝしく覺おぼゆれば、目めとまることも例れいのなかりけり。

侍従宰相じじゆうさいさうの五節ごせつの局つづね、宮みやの御前ごまへのかた見わたすばかりなり。立た蒞しぬのかみより音おとに聞きく簾すだれのしも見みゆ。人の物ものいふ聲こゑもほの聞きこゆ。かの女御にょおの御方ごかたに、左京さけい、馬うまといふ人ひとなん、いと馴なれてまじりたれと、宰相さいさう中將ちゆうしやう昔むかし見み知りて語かたり給たまふを、一夜いちやかのかいつくろひにてゐたりし、ひんがしなりしなん左京さけいと、源少將げんせうしやうも見み知りたりしを、物もののよすがありて、傳つたへ聞ききたる人々ひとびと「をかしくもありけるかな」と云いひつゝ、いさ、知しらず顔かほにはあらじ、昔むかし心こころにくだちて、見みならしけむ内うちわたりを、かゝる様さまにてやは出いて立たつべき。しのぶと思おもふらんを、現まはさんさんの心こころにて、御前ごまへに扇あふぎどもあまたさぶらふ中に、蓬よもぎ来きつくりたるをしも選えりたる、心こころばへあるべし、見み知りけんやは。

宮の蓋にひろげて、日蔭をまろめて、そろひたる櫛ども、白き物いみして、つまづまを結びそへたり。少しさだすぎ給ひにたるわたりにて、櫛のそりざまなんなほくしきと、公達のためへば、今様の様悪しきまで、つまも合せたるそらしざまして、黒方をおしまろがして、ふつゝかにしり割き切りて、白き紙一重にたて文にしたり。大輔のおもとして書きつけさす。

多かりし鑿の宮人さしわきてしるき日蔭をあはれとぞ見し

御前には同じくはをかき様にしなして、扇などもあまたこそと、のたまはずれどおどろくしからむも、事の様にあはざるべし。わざと遣すにては、しのびやかにけしきばませ給ふべきにも侍らず。これはかゝる私事にこそ」ときこえさせて、顔しるかるまじき局の人して、これ中納言の君の御局より左京の君に奉らんと、高やかにさしおきつ。引きとどめられたらんこそ見苦しけれと思ふに、走り來たり。女の聲にて、いづこより入り來つると問ふなりつるは、女御殿のと疑ひなく思ふなるべし。

なにばかりの耳とどむる事もなかりつる日頃なれど、五節過ぎぬと思ふ内わたりのけはひ、うちつけにさうさうしき。小忌の日の夜の調樂は、げにをかしかりけり。若やかなる殿上人など、

いかに名残つれづれならん。

高松の小公達さへ、こたみ入らせ給ひし夜よりは、女房ゆるされて、間もなく通りありき給へば、いとほしたなげなりや。さだすぎぬるを效にてぞかくぞふる。五節戀しきなども、殊に思ひたらず、やすらひ、小兵衛などや、その裳の裾、汗衫にまつはれてぞ、小鳥のやうに轉りざれおはさうずめる。

臨時の祭の使は、殿の權中將の君なり。その日は、御物忌なれば、殿御とのみせさせ給へり。上達部も、舞人の公達も籠りて、夜一夜、細殿わたりいともの騒がしきはひしたり。つとめて内のおほいどのの御隨身、こ殿の御隨身にさしとらせていける。ありし筈の蓋に白がねのさうし筈をすゑたり、鏡おしいれて、洗の櫛、白金の筭など、使の君の髪かかせ給ふべきけしきをしたり。筈の蓋に鞆手にうちいてたるは、日かげの返事なめり。

ひかげ草かがやくかげやまがひけんますみの鏡くもらぬものを(校訂者云、寛永本ニハコノ歌ナシ)

文字二つ落ちてあやしう。ことの心違ひてもあるかな、と見えしは、かの大匠の、宮よりと心え給ひて、かうことごとしくし給へるなりけりとぞ聞き侍りし。はかなかりしたいふのわざ

を、いとほしうことごとしうこそ。

殿とののうへも、まうのぼりて物御ものご覽らんず。使つかひの君きみの藤かざして、いとものくしくおとなび給へるを、くらの命婦いのちめは、舞人まいにんには目めも見みやらず、うちまもり／＼ぞ泣なきける。御物忌ものごしなれば、御社みやしろより、丑うしの時にぞ還かへりまれば、御神樂みかみらなどもさまばかりなり。兼時かねときが、去年こぞまではいとつきづきしげなりしを、こよなく衰おとろへたるふるまひぞ、見みしるまじき人のうへなれど、あはれに思おもひよそへらるゝこと多く侍まる。

記 日 部 式 業

師走しゅうさいの二十九日にじゅうくにち参まゐる。はじめて参まゐりしも今宵こんじゆうの事ことぞかし。いみじくも夢路ゆめぢに惑まどはれしかたと、思おもひ出いづればこよなくたちなれにけるも、うとましの身の程ほどやと覺おぼゆ。夜よいたう更かげにけり。御物忌ものごしにおはしましければ、御前みまへにも参まゐらず。心細こころほそくてうち臥ふしたるに、前まへなる人々の「うちわたりは猶なほいとけはひ異ことなりけり。里さとにては、今は寝いなましものを、さもいざとき履くつの繁しげさかな」と、色めかしくいひ居またるを聞き、

年暮としくれて我が世よふけゆく風の音こゝろに心のうちこゝろのすさまじきかな

とぞひとりごたれし。

つごもりの夜、追儼つゑんはいと疾はやくはてぬれば、鐵漿てつじやうつけなど、はかなきつころひどもすとて、うちとけ居ゐたるに、辨しんの内侍うちわらひ來きて物語ものがたりして、臥ふし給たまへり。内匠うちなの藏人くらひは、長押ながしの下しもにゐて、あてきか繕ぬふもの、かさね、ひねりをしへなど、つくづくとし居ゐたるに、御前おまへの方に、いみじくのゝしる。内侍うちわらひ起おきせどとみにも起おきず。人の泣なき騒さわぐ音ねの聞きゆるに、いとゆゝしくものも覺おぼえず。火ひかと思おもへど、さにはあらず。内匠うちなの君きみいざ／＼と先まへにおしたてて、ともかうも、宮下みやしもにおはします。まづ參まゐりて見奉みたてまつらんと、内侍うちわらひを荒あらかにつき驚おどろかして、三人さんにんふるう／＼、足あしもそらにて參まゐりたれば、裸はだかなる人ひとぞ二人ふたりゐたる。觀負くわんひ小兵部こへいぶなり。かくなりけりと見るに、いよ／＼むくつけし。御厨子みづしどころ所ところの人ひとも皆みな出て、宮みやのさぶらひも、瀧口たきぐちも、雛ひなやらひはてけるまゝに、皆みなまかでてけり。手てを叩たたきのゝしれどいらへする人もなし。御廳おのゝやど宿とどの刀やいば自よを呼よびいでたるに、殿上とのうへに兵部丞へいぶしやうと藏人くらひを呼よべ／＼と、恥はかれもわすれて口くちづからいひたれば、尋たづねけれど罷出まはりけり。つらきこと限りなし。式部丞しきぶしやう資業すけがらぞ參まゐりて、ところどころのさし油あぶらども、ただ一人ひとりさしいれてありく。人々ひとびとも覺おぼえず、むかひ居ゐたるもあり、うへより御使つつかひなどあり、いみじう恐おそろしうこそ侍まりしか。納殿のまどのにある御衣おのぞとり出いださせて、この人々に賜たまふ。朔日ついでちの裝飾きざしは、とられざりければ、さりげもなく

てあれど、裸姿は忘られず。恐ろしきものから、をかしようとも云はず。

正月一日、こといみもしあへず、坎日なりければ、わか宮の御戴餅のこと停まりぬ。三日ぞまうのぼらせ給ふ。今年の御まかなひは、大納言の君、装飾、朔日の日は、紅葡萄染、唐衣は赤色、地摺の裳。二日、紅梅の織物、襷練に濃き青色の唐衣、色摺の裳。三日は、唐綾の櫻重唐衣は蘇芳の織物、襷練は、濃きを着る日は、くれなるはなかに、紅をきる日は、こきをなかになど例のことなり。萌黄、蘇芳、山吹の濃き薄き、紅梅、薄色など、常の色々を一度に六つばかりと、上衣とぞ、いと様よきほどに侍る。

宰相の君の、御佩刀とりて、殿の抱き奉らせ給へるに、續きてまう上り給ふ。紅の三重五重、みへいつへとませつゝ、同じ色のうちたる七重に、ひとへを縫ひかさねくませつゝ、上に同じ色の固紋の五重、桂、葡萄染の浮紋の櫃の紋を織りたる、縫ひざまさへかどくし。三重がさねの裳、あか色の唐衣、ひとへの紋を織りて、し様もいと唐めいたり。いとをかしげに髪なども常よりつくろひ、まして容體もてなし、らうくしくをかし。丈だちよき程に、ふくらかなる人の顔いと細かに、にほひをかしげなり。

大納言の君は、いとさゝやかに、小しといふべきかたなる人の、白う美しげに、つぶくと肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪だけに三寸ばかりあまりたる裾つき、髪刺などぞ、すべて似るものなく、細やかに美しき。顔もいとらう／＼しく、もてなしたるなどらうたげに、なよびかなり。宣旨の君は、さゝやけ人の、いと細やかにそびえて、髪のすぢ細やかに、清らにて、生ひ下りの末ながに一尺ばかり餘り給へり。いと心取かしげに、きはもなくあてなる様し給へり。物よりさし歩み出でおはしたるも、煩はしう心づかひせらるゝ心地す。あてなる人は、かうこそあらめと、心様ものうちのたまへるも覺ゆ。

紫式部日記

この次に、人のかたちを語り聞えさせば、物いひさがなくや侍るべき。唯今をや、さしあたりたる人の事は煩はし。いかにぞやなど、少しもかたほなるはいひ侍らじ。宰相の君は、北野三位のよ。ふくらかにいと容體こまめかしう、かど／＼しきかたちしたる人の、うち居たるよりも、見もて行くに、こよなくうち勝りらう／＼しくて、つらつきに、はづかしげさも、匂ひやかなる事も添ひたり。もてなしいと美々しく、華やかにぞ見え給へる。心ざまもいとめやすく、心美しきものから、またいと取かしき所添ひたり。

小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳の様したり。容體いと美しげに、もてなし心にくく、心ばへなども、我が心とは思ひとる方もなきやうに物づつみをし、いと世を恥らひ、あまりに見苦しきまで、兒めい給へり。腹きたなき人、悪しざまにもてなし、いひつくる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をも失ひつべく、あえかにわりなき所そひ給へるぞ、あまりうしろめたげなる。

宮の内侍ぞ、又いと清げなる人。丈だちいとよき程なるが、ゐたる様、姿つき、いとものくしく今めいたる容體にて、細かに取りたててをかしげとも見えぬものから、いともの清げにうひくしく、なか高き顔して、色のあはひ白きなど人にすぐれたり。頭つき、髪刺、額つきなどぞ、あなものの清げと見えて、華やかに愛敬つきたる。ただありにもてなして、心様などもめやすく、露ばかりいづかたざまにも後めたき方なく、すべてさこそあらめと、人のためしにしつべき人がらなり。艶がりよしめく方はなし。

式部のおもとは弟なり。いとふくらげさ過ぎて肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいと細かによく侍る。髪もいみじく麗しくて、長くはあらざるべし。つくろひたるわざして、宮に

は参る。ふとりたる容體の、いとをかしげにも侍りしかな。眸、額つきなど、まことに清げなる、うち笑みたる愛敬も多かり。

若人の中に、かたちよしとおもへるは、小大輔、源式部などいふは、さゝやかなる人の、容體、いと今めかしきさまして、髪麗しく、もとはいとこちたくて、丈に一尺よ餘りたりけるを、おち細りて侍り。顔もかどくしう、あなをかしの人やとぞ見えて侍る。かたちは、直すべき所なし。源式部は、丈よき程にそびやかなる程にて、顔細やかに、見るまゝにいとをかしく、らうたげなるけはひ、もの清くかはらかに、人のむすめとおぼゆる様したり。

小兵衛の丞なども、いと清げに侍り。それらは、殿上人の見残す少なかなり。誰もとりはづしてはかくれなけれど、人ぐまをも用意するに、かくれてぞ侍るかし。

宮木の侍従こそいと細やかにをかしげなりし人。いと小さく細く、なほ童にてあらせまほしき様を、心と老いつき、やつしてやみ侍りにし。髪の桂に少しあまりて、末をいと華やかにそぎてまゐりたりしぞ、はての度なりける。顔もいとよかりき。

五節の辨といふ人侍り。平中納言の、むすめにして額いたうはれたる人の、背いたうひきて、

顔もこゝはと見ゆる所なく、いと白う、手つき腕つき、いとをかしげに、髪は、見はじめ侍りしすそは、丈に一尺ばかり餘りて、こちたく多かりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、裾もさすがに細らず、長さはすこし餘りて侍るめり。

小馬といふ人、髪いと長く侍りし。昔はよき若人、今は琴柱に膠さすやうにてこそ、里居して侍るなれ。かういひくゝて、心ばせぞかたう侍るか。それもとりどりにいと悪きもなし。又すぐれてをかしう、心重く、かどゆゑも、よしも、後安さも、皆具することは難し。様々いづれをかとるべきと、覺ゆるぞ多く侍る。さもけしからずも侍ることどもかな。

齋院に、中將の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書き交はしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそ艶に、我のみ世には物のゆゑ知り、心深き類はあらじ。すべて、世の人は心も肝も無きやうに、思ひて侍るべかめる。見侍りしに、すずろに心やましうおほやけばらとか、よからぬ人の云ふやうに、憎くこそ思ふ給へられしか。文書きにもあれ、歌などのをかしからむは、我院より外に、誰れか見知り給ふ人のあらん。世にをかしき人の生ひひでは、我が院こそ御覽し知るべけれ、などぞ侍る。

げにことわりなれど、わが方さまのことを、さしもいはば、齋院より出てきたる歌の、すぐれてよしと見ゆるも殊に侍らず。唯いとをかしう、よし／＼しうはおはすべかめる所のやうなり。さぶらふ人を比べていどまんには、この見給ふるわたりの人に、必しも、彼はまさらじを、常に入りたちて見る人もなく、をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、郭公の尋ね所にまゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはして、ところのさまはいと世離れてさびたり。またまぎるゝ事も無し。うへにまうのぼらせ給ふ、もしは殿なん参り給ふ。御とのゐなるなど、もの騒がしき折もまじらず。ことつけ、おのづからしる好む所となりぬれば、艶なることどもをつくさん中に、なにの奥なきいひすぐしをかはし侍らん。かういと埋れ木を折り入れたる心ばせにて、かの院に交らひ侍らば、そこに知らぬ男に出てあひ、ものいふとも、人のあうなき名を、いひおほすべきならずなど、心ゆるがして、おのづからなまめきならひ侍りなんをや。

まして若き人のかたちにつけて、年の齡につまましきことなき、おの／＼の心に入りてけさうだち、物をもいはんと好みたちたらむは、こよなる人に劣るも侍るまじ。されど内わたりにて、明け暮れ見ならし、きじろひ給ふ女御后おはせず、その御方かの細殿と、いひならぶる御あたり

もなく、男も女も、いどましき事もなきにうちとけ、宮のやうとして、色めかしきをば、いとあはくしとおぼしめいたれば、少しよろしからんと思ふ人は、馳げにて出でゑ侍らず。心やすくもの恥せず、とあらんかゝらんの名をも惜まぬ人、はた異なる心ばせのぶるもなくやは。

唯さやうの人のやすきまゝに、立ちよりてうち語らへば、中宮の人々埋れたり。もしは用意なしなどもいひ侍るなるべし。上臈中臈の程ぞ、餘り引き入りざうずめきてのみ侍るめる、さのみして宮の御ため物の飾にはあらず。見苦しとも見侍り。これらをかくえりて侍るやうなれど、人は皆とりどりにて、こよなう劣り優る事も侍らず。そのこと疾ければ、かのことおくれなどぞ侍るめるかし。されど若人だに、重りかならんとまめだち侍るめる世に、見苦しうざれ侍らんも、いとかたはならん。ただ大方を、いとかく情なからずもがなと見侍る。

されば、宮の御心あかぬ所なく、らうくしく心にくくおはしますものを、あまり物つつみせさせたまへる御心に、何とも云ひ出でじ。云ひ出でんも後やすく恥なき人は、世にかたはものとおぼしならひたり。げに物の折など、なか／＼なることし出でたる、後れたるには劣りたるわざなりかし。殊に深き用意なき人の、所につけて我れは顔なるが、なまひがくしきことも、物の

折にいひ出だしたりけるを、まだいと幼き程におはしまして、世になう、かたはなりと聞き召しおぼしみにければ、ただことなる咎なくて過ぐすを、ただめやすき事におぼしたる御けしきに、うちこめいたる人のむすめどもは、皆いとようかなひ聞えさせたる程に、かくならひにけるとぞ心えて侍る。

式部 今はやう／＼おとなびさせ給ふまゝに、世のあべきさま、人の心の善きも悪きも、過ぎたるも遅れたるも、みな御覽じ知りて、この宮わたりのことを、殿上人もなにも目馴れて、殊にをかしきこと無しと思ふべかめりと、皆しろしめいたり。さりとして、こころにくくもありはず、とりはづせば、いとあはづけい事も出て來るものから、なさげなくひき入れたる、かうしてもあらなむとおぼしの給はすれど、そのならひなほり難く、又今やうの公達といふもの、たはるゝかたにて、ある限り皆まめ人なり。齋院などやうの所にて、月をも見、花をも賞づる、ひたぶるの艶なることは、おのづから求め思ひてもいふらん。

朝夕たちまじり、ゆかしげなきわたりに、ただことをも聞き寄せ、うちいひ、もしはをかしき事をもいひかけられて、いらへ恥なからず、すべき人なん、世に難くなりたるとぞ、人々は云

ひ侍るめる。みづからえ見侍らぬことなればえ知らずかし。必ず人の立ちより、はかなきいらへをせんからに、にくいことをひき出でむぞあやしき。いとようさてもありぬべきことなり。これを人の心ありがたしとはいふに侍るめり。などか必ずしも面憎く、ひき入りたらんがかしこからん。又などで、ひたゝけてさまよひさし出づべきぞ。よき程に折々の有様にしたがひて、用ゐんことこのいと難きなるべし。

先は、宮の太夫まゐり給ひて、啓せさせ給ふべき事ありける折に、いとあえかに見ぬ給ふ上藤たちは、對面し給ふこと難し。又あひても何事をか、はかばかしくの給ふべくも見えず、言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにも侍らねど、つゝまし恥かしとおもふに、僻言せらるゝをあいなく、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ、外の人はず侍らざなる。かゝるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も、皆世に従ふなるを、ただ姫君ながらのもてなしにて、大納言こゝろよからずと思ひたなれば、さるべき人々里にまかて、局なるも、わりなきいとまに障る折々は、對面する人なくて、まかて給ふときも侍るなり、そのほかの上達部、宮の御方に參りなれ、物をも啓せさせ給ふは、おの／＼の心よせの人、おのづからとりどりにほの知り

つゝ、その人ない折は、すさまじげに思ひ、立ち出づる人々の、事にふれつゝ、この宮わたりのこと「埋れたり。」など、いふべかめるも、ことわりに侍る。

齋院わたりの人も、これをおとしめ思ふなるべし。さりとして、我が方の見所あり。外の人は目も見知らじ、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらんこそ、又わりなき。すべて人をもどくかたは易く、わが心をもちぬんことは難かべいわさを、さは思はて、まづわれさかしき、人をなきになし、世をそらなる程に、心のきはのみこそ見え顯るめれ。いと御らんぜさせまほしう侍りし文書かな。人の隠しおきたりけるを盗みて、みそかに見せて、とりかへし侍りにしかば、ねたうこそ。

紫式部日記

和泉式部といふ人こそ、面白う書き交しける。されど、和泉はけしからぬ方こそあれ。うちとけて文走り書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉のほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと、ものおぼえ、歌のことわり、まことのうたよみさまにこそ侍らざめれ。口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目とまる詠み添へ侍り。それだに人の詠みたらん歌なん、ことわりたるは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるゝなめりとぞ、見

えたるすぢに侍るかし。恥づかしげの歌よみやとは覺え侍らず。

丹波守かの北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡まきひら衛門とぞいひ侍る。殊ことにやんごとなき程ほどならねど、まことにゆゑなくしく、歌よみとてよろづの事ことにつけて、よみ散ちらさねど、聞きえたる限かぎりは、はかなき折節せきせつのことも、それこそ恥はづかしき口くちつきに侍れ。やゝもせば、腰こしはなれぬばかり折せれかゝりたる歌を詠よみいで、えもいはぬよしばみごととしても、我れかしこに思おもひたる人、にくくもいとほしくも、おぼえ侍るわざなり。

辨清少納言ひんせいすくなごんこそ、したり顔がほにいみじう侍りける人。さばかり賢まかしだち、眞字まんなか書き散ちらして侍るほども、よく見れば、まだいと堪たへぬこと多おほかり。かく人に異ことならんと思おもひ好このめる人は、必ず見おとりし、行く末すえうたてのみ侍れば、艶えんになりぬる人は、いとすごうすろなる折せきも、ものあはれにすゝみ、をかしきことも見過すぐさぬ程ほどに、おのづからさるまじく、あだなる様さまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のほて、いかでかはよく侍らん。

かくかたがたにつけて、一ふしの思おもひいで、取るべき事ことなくて過すぐし侍りぬる人の、殊ことに行くすゑの頼たのみなきこそ、慰なぐさめ思おもふ方かただに侍らねど、心こころすごうもてなす身みぞとだに思おもひ侍らじ。その

心なほ失せぬにや、もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でてゐてながめば、いとど月やいにしへはめてけむと、見えたる有様を、催すやうに侍るべし。世の人の思むといひ侍る咎をも、必ずわたり侍りなると、憚かられて、少し奥に引き入りてぞ、さすがに心のうちには、盡せず思ひ續けられ侍る。

風の涼しき夕暮、聞きよからぬひとり琴をかき鳴らしては、なげき加はると聞き知る人やあらんと、ゆゝしくなど覺え侍ること、をこにもあはれにも侍りけれ。さるは、あやしう黒み煤けたる曹司に、箏の琴、和琴しらべながら、心に入れて、「雨ふる日、琴柱倒せ」などもいひ侍らぬまゝに、塵つもりてよせたりし厨子と、柱のはざまに、首さし入れつゝ、琵琶も左右にたて侍り。大きな厨子一雙に、隙もなく積みて侍るもの、ひとつには、ふる歌物語の、えもいはず巖の巢になりたる、むづかしくはひちれば、開けて見る人も侍らず。片つ方に、文どもわざと置き重ねし、人も侍らずなりにし後、手觸る人もことになし。それらをつれづれせめてあまりぬる時、一つ二つひきいでて見侍るを、女房集まりて、「おまへはかくおはすれば、御さいはすくなくきなり。なでふ女が眞字書は讀む。昔は經讀むをだに、人は制しき」と、しりうごちいふを聞き

侍るにも、物忌みける人の行く末、いのち長かるめるよしども、見えぬためしなりと、いはまほしく侍れど、思ひ隈なきやうなり。ことはたさもあり。よろづの事、人によりてことごととなり。

誇りにきら／＼しく、心地よげに見ゆる人あり。よろづつれづれなる人の、まぎるゝことなきまゝに、古き反古ひき捜し、行ひがちに、口ひびらかし、數珠の音高きなど、いと心つきなく見ゆるわざなりと、思ひ給ふべく、心に任せつべき事をさへ、わが仕ふ人の目に憚り、人につゝむ。まして人の中にまじりては、いはまほしきことも侍れど、いでやおもほえ、心うまじき人には、いひてやく無かるべし。物もどきうちし、我れはと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふ事ももの憂く侍る。殊にいとしも、物のかたがたえたる人は難し。ただ我が心の立てつる筋をとらへて、人をばなきになすめり。それ心よりほかの我が面影を恥つと見れど、えさらずさし向ひ、まじりゐたる事だにあり。しかじかさへもどかれじと、恥かしきにはあらねど、**むづかしと**思ひて、ぼけられたる人に、いとどなりはてて侍れば、かうは推し暈らざりき。

「いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、そば／＼しき様して、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見落さんものとなむ、皆人々云ひ思ひつゝにくみしを、見るには

あやしきまでおいらかに、こと人かとなんおほゆる。」とぞ、皆いひ侍るに恥かしく、人にかう、おいそけものと、見落されにけるとは思ひ侍れど、ただこれぞ我が心と、ならひもてなし侍る有様、宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ」と、のたまはする折々侍り。くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人にぞ、そばめだてられて侍らまし。さまよう、すべて人はおいらかに、少し心おきてのどやかに、おちるぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしう後やすけれ。もしは、色めかしくあだくしけれど、本性の人がら癖なく、傍のため見えにくき様せずだになりぬれば、にくうは侍るまじ。

業式部日記

我れはと、くすしく、口もち、けしきことごとしくなりぬる人は、たちゐにつけて、われ用意せらるゝ程に、その人には目とどまる。目をしとどめつれば、必ず物をいふ言葉の申にも、きてゐるふるまひ、立ちて行く後てにも、必ず癖は見つけらるゝわざに侍り。物いひ少しうち合はずなりぬる人と、人のうへうちおとしめつる人とは、まして耳も目も、たてらるゝわざにこそ侍るべけれ。人の癖無き限りは、いかで、はかなき言の葉をも聞えじとつゝみ、なげのなさけつくらまほしう侍り。

人すゝみて、にくい事し出でつるは、悪きことを過ちたらんも、いひ笑はんには憚りなうおぼえ侍り。いと心よからん人は、我れをにくむとも、我れはなほ人をおもひうしろむべけれど、いとさしもえあらず。慈悲深うおはする佛だに、三寶をそしる罪は、淺しとやは説き給ふなる。まいてかばかりに、濁り深き世の人は、猶つらき人はつらかりぬべし。それを我れまさりていはんと、いみじき言の葉をいひつけ、向ひてけしき悪しうまもり交はずとも、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけぢめぞ、心の程は見え侍るかし。

齋宮の内侍といふ人侍り。あやしう、こゝろによからず思ひけるもえ知り侍らぬ、心憂きしりうごとの、多うきこえ侍りし。うちのうへの源氏の物語、人に讀ませ給ひつゝ、聞し召しけるに、「この人は日本紀をこそ讀み給ふべけれ。誠に才あるべし」との給はせけるを、ふと推し量りに、いみじうなん才あると、殿上人などに云ひ散らして、日本紀の御局とぞついたりける。いとをかしくぞ侍る。この故郷の女の前にてだに、つゝみ侍るものを、さる所にて才さかしくて侍らんよ。この式部丞といふ人の、童にて文讀みはべりし時、聞きならひつゝ、かの人は遅う讀みとり、忘るゝ所をも、あやしきまでぞ敏く侍りしかば、文に心入れたる親は、「口惜しう、男子にて持たぬ

こそ幸なかりけれ」とぞ、常に敷かれ侍りし。

それを、男だに才がりぬる人は、いかにぞや、華やかならずのみ侍るめると、やうく人の云ふも聞きとどめて後、一といふ文字をだに、書きわたし侍らず、いとてづつにあさましく侍り。讀みし文などいひけん物、目にもとどめずなりて侍りしに、いよ／＼かゝること聞きしかば、いかに人も傳へ聞きてにくむらんと、恥かしさに、御屏風の上に書きたることをだに、讀まぬ顔をし侍らざりしを、宮の御前にて、文集の所々讀ませ給ひなどして、さるさまの事知らしめさせまほしげに覺いたりしかば、いとしのびて人のさぶらはぬひま／＼に、おとどしの夏の頃より、樂府といふ文一卷をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠し侍り。宮もしのびさせ給ひしかど、殿もうちもけしきを知らせ給ひて、御文どもをめてたう書かせ給ひてぞ、殿は奉らせ給ふ。まことにかう讀ませ給ひなどする事、はたかのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらばいかに誹り侍らんものと、すべて世の中ことわざ變きものに侍りけり。

いかにも今は、言忌し侍らじ。人、といふとも、かくいふとも、ただ阿彌陀佛にたゆみなく經をならひ侍らん。世の厭はしき事は、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならん

に、憚^せ怠^{はい}すべ^らも侍^はらず。唯^たひた^まちに背^{そむ}きても、雲^{くも}にの^ぼらぬ程^{ほど}のた^ゆた^ふべきやうなん侍^はるべ^かなる。それにやすらひ侍^はるなり。年^{とし}もはた、よき程^{ほど}になりもてまかる。いたうこれより老^おいぼれて、はた、めづらにぞ經^き讀^よまず、心^{こころ}もいとどた^ゆさまさり侍^はらんものを。心^{こころ}深^{ふか}き人^{ひと}眞^ま似^ねの様^{よう}に侍^はれど、今^{いま}はただ、かゝる方^{かた}の事^{こと}をぞ思^{おも}ひ給^{たま}ふる。それ罪^{つみ}深^{ふか}き人^{ひと}は、また必^{かなら}ずしもかなひ侍^はらじ。前^{まへ}の世^よしらるゝことのみ多^{おほ}う侍^はれば、よろづにつけてぞ悲^{かな}しく侍^はる。

御^ご文^{ぶん}にえ書^かき續^{つづ}け侍^はらぬ事^{こと}を、よきもあしきも世^よにあること、身^みの上^{うへ}のうれへにても、殘^{のこ}らず聞^きこえさせおかまほしう侍^はるぞかし。けしからぬ人^{ひと}を思^{おも}ひ聞^きこえさせずとも、かゝるべいことや侍^はる。されどつれづれにおはしますらむ、又^{また}つれづれの心^{こころ}を御^ご覽^{らん}せよ。またおほさんことの、いとから益^{えき}なしごと、多^{おほ}からずとも書^かかせ給^{たま}へ。見^み給^{たま}へん。夢^{ゆめ}にても散^ちり侍^はらば、いとみじからむ。みよも多^{おほ}くぞ侍^はる。この頃^{ころ}、反^{ほん}古^こども皆^{みな}やりき失^{うしな}ひ、雖^ひななどの屋^や作^{ぞう}りに、この春^{はる}し侍^はりにし後^{のち}、人^{ひと}の文^{ぶん}も侍^はらず、紙^{かみ}にわざと書^かかじと思^{おも}ひ侍^はるぞいとやつれたる。こと悪^{わる}きかたには侍^はらず。殊^{ことごと}更に、御^ご覽^{らん}じてはとう給^{たま}はらん。え讀^よみ侍^はらぬ所^{ところ}々、文^{ぶん}字^じ落^おしぞ侍^はらん。それは何^{なに}かは。御^ご覽^{らん}じ、漏^もらさせ給^{たま}へかし。かく世^よの人^{ひと}ごとのうへを思^{おも}ひて、はてにとぢめ侍^はれば、身^みを思^{おも}ひすてぬ

心の、さも深う侍るべきかな、何せんとにか侍らん。

十一日の曉、御堂へわたらせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟に乗りてさしわたりけり。それには後れて、ようざり参る。教化おこなふ所、山・寺の作法うつして大懺悔す。白い塔など、繪にかいて、興じあそび給ふ。上達部、多くはまかて給ひて、少しぞとまり給へる。後夜の御さうし教化ども、説相みな心々、二十人ながら、宮のかくておはします由を、こちかひきしなことはたえて笑はるゝ事もあまたあり。

紫式部日記

事はてて、殿上人舟に乗りて、皆漕ぎつづきてあそぶ。御堂の東のつま、北向におしあけたる戸の前、池に造りおろしたる橋の勾欄をおさへて、宮の太夫は居給へり。殿あからさまに参らせ給へる程、宰相の君など物語して、御前なれば、うちとけぬ用意、内も外もをかしき程なり。

月曜にさし出でて、若やかなる公達、今様歌うたふも、船に乗りおほせたるを、若うをかしく聞ゆるに、大藏卿の、おふなくまじりて、さすがに、聲うち添へんもつゝましきにや。しのびやかにて居たる後でのをかしろ見ゆれば、御簾の内の人も、みそかに笑ふ。舟のうちにや老いをばかこつらんといひたるを、聞きつけ給へるにや。太夫、「徐福文成証誑多し」と、うち誦し給

ふ聲こゑも様さまも、こよなう今いまめかしく見みゆ。池いけのうき草くさとうたひて、笛ふえなど吹ふき合あせたる、曉あかつき方の風かぜのけはひさへぞ心こころことなる。はかない事ことも、所ところがら折おがらなりけり。
源氏もののけたりの物語ものがたり、御前おまへにあるを、殿とのの御覽みらんして、例れいのすずることども出いてきたるついでに、梅うめの枝えだに、敷しかれたる紙かみに書かかせ給たまへる、

すきものと名なにしたてれば見みる人の折おらですぐるはあらじとぞ思おもふ
たまはせられたれば、

人にまだ折おられぬものを誰たれかこのすきものぞとは口くちならしけむ
めざましうと聞きこゆ。渡わた殿どのに寝ねたる夜よ、戸とをたゞく人ひとありと聞きけど、恐おそしさに、音おともせて明あかし
たるつとめて、

夜よもすがら水雞みづせきよりけに鳴なくくぞまきの戸と口ぐちにたゞきわびつる
かへし

ただならじとばかりたゞく水雞みづせきゆゑあけてはいかにくやしからまし
寛弘六年十月四日一條院燒亡

十九日 行幸左大臣枇杷殿

十一月廿五日第三皇子誕生十二月廿六日中宮入内

今年正月三日まで、宮たちの御戴き餅に、日々にまうのぼらせ給ふ。御供にみな上臈もまゐる。左衛門の督、いただい奉り給ひて、殿、餅はとりつぎて、うへに奉らせ給ふ。二間の東の戸に向ひて、うへの戴かせたてまつらせ給ふなり。おりのぼらせ給ふ儀式、見ものなり。大宮はのぼらせ給はず。今年の朔日、御まかなひ、宰相の君、例は物の色合など、殊にいとをかし。藏人は、たくみ、ひやうご、仕うまつる。髪上げたるかたちなどこそ、御まかなひはいとことに見え給ふ。わりなしや、くすりの女官にて、ふやの博士さかしだち、さいらぎゐたり。膏薬配れる、例の事どもなり。

二日、宮の大饗はとまりて、臨時客、東面とりはらひて、例のごとし。上達部、傳の大納言、右大將、中宮太夫、四條大納言、權中納言、侍従の中納言、左衛門督、有國の宰相、大藏卿、左兵衛督、源宰相、むかひつゝ居給へり。源中納言、左兵衛督、左右の宰相中將は、長押のしもに、殿上人の座の上につき給へり。若宮抱きいで奉り給ひて、例のことどもいはせ奉り、うつくしみ

聞こえ給ふ。うへに、いと宮抱き奉らんと、殿の給ふを、いと嫉きことにし給ひて、あゝとさいなむを、うつくしがりきこえ給ひて、申し給へば、右大將など興じきこえ給ふ。

うへにまゐり給ひて、うへ、殿上にいでさせ給ひて、御あそびありけり。殿、例の酔はせ給へり。煩はしと思ひて、隠ろへるたるに、「など、さてこの御まへの御遊びに召しつるに、さぶらはて、いそぎまかでにける、ひがみたり」などむづからせ給へる。「さるばかり歌一つ仕うまつれ。

親のかほりに、はつ子の日なり。よめく」と責めさせ給ふ。うちいでんに、いとかたはならん。こよなからぬ御酔ひなめれば、いとど御色合きよげに、火影華やかにあらまほしくて、年ごろ宮のすさまじげにて、ひとところおはしますを、さうさうしく見奉りしに、かくむづかしきまで、

左右に見奉るこそ嬉しけれと、大殿ごもりたる宮たちを、ひきあけつゝ見奉り給ふ。「野邊に小松のなかりせば」と、うち誦し給ふ。新しからん事よりも、折ふしの人の有様、めでたくおぼえさせ給ふ。

又の日、夕つかた、いつしかと霞みたる空を、作りつづけたる軒のひまなさにて、ただ渡殿のうへの程を、ほのかに見て、申務の乳母と、よへの御口ずさみを賞てきこゆ。この命婦そ物の心

業式部日記

して、かどくしくは侍る人なれ。

あからさまにまか出て、二の宮の御五十日は、正月十五日、その曉まるるに、小少將の君、明けはてはしたなくなりたるに参り給へり。例の同じ所に居たり。二人の局を一つに合せて、かたみに里なる程を住む。一度に参りては、几帳ばかりを隔にてあり。殿ぞわたらせ給ふ。かたみに知らぬ人も、かたらはるゝなど、聞きにくく。されど誰も、さるうとくしきことなければ、心やすくてなん。

紫 式 部 日 記

日たけてまう上る。かの君は、櫻の織物の袷、赤色の唐衣、例の摺裳着給へり。紅梅に、柳の唐衣、裳の摺目など今めかしければ、とりも代へつべくぞ若やかなる。うへ人ども十七人ぞ、宮の御方に参りたる。いと宮の御まかなひは、橘の三位、とりつぐ人、はしには大輔、式部、内には小少將。帝、后、御帳のうちに二所ながらおはします。朝日の光りあひてまばゆきまで、恥かしげなる御前なり。うへは、御直衣、小口奉り、宮は例の紅の御衣、紅梅、萌黄、柳、山吹の御衣、上には、葡萄染の織物の御衣、柳の上白の御小袷、紋も色もめづらしく今めかしき奉れり。あなたば、いとけさうなれば、この奥に、やをらすべりとどまりてゐたり。中務の乳母、宮いだ

き奉りて、御帳のはざまより南さまにゐて奉る。細かにそばくしくなどはあらぬかたちの唯ゆるらかに、ものくしき様うちして、さる方に人をしつべく、かどくしきけはひぞしたる。葡萄染の織物の小袷、無紋の青色に、櫻の唐衣着たり。

その日の人の装束、いづれとなく盡したるを、袖口のあはひわろう重ねたる人しも、御前の物とりいるとて、そこらの上達部、殿上人に、さしいでてまもられることとぞ、後に宰相の君など、口惜しがり給ふめりし。さるは悪しくも侍らざりき。ただあはひのさめたるなり。小侍従は、紅一重、上に紅梅の濃き薄き、五つを重ねたり。唐衣、櫻。源式部は、濃きに、又紅梅の綾ぞ着て侍るめりし。織物ならぬをわろしとにや。それあながちの事。けさうなるにしもこそ、とりあやまちの、ほの見えたらん側目をも、えらせ給ふべけれ。衣の劣勝はいふべきことならず。餅參らせ給ふことどもはてて、御臺などまかでて、廂の御簾上ぐるきはに、うへの女房は、御帳の西おもての晝御座に、おし重ねたるやうにて並居たる。三位をはじめて、内侍のすけたちもあまた参れり。

宮の人々は、若人は長押のしも、東の廂の南のさうしはなちて、御簾かけたるに、上臈はゐた

り。御帳ひんがしの東のはざま、ただ少しあるに、大納言の君、小少將の君、み給へる所に尋ね行きて見
る。うへは、平敷ひらしきの御座まじに、御膳おのまゐりすゑたり。御前おまへのもの、したる様さま、いひつくさん方かたなし。
篋すのこ子こに北向きたむきに西にしをかみにて、上達部かたぎめ、左ひだり、右みぎ、内うちの大臣殿おほいぢ、春宮太夫、四條大納言、それより
下しもはえ見侍まじらざりき。御あそびあり。殿上人は、この對たいのたつみにあたりたる廊ちやうにさぶらふ。地
下かきは定さだまれり。かげまさの朝臣あそん、これかぜの朝臣あそん、ゆきよし、ともまさ等なごやうの人々、うへに、
四條大納言拍子はうしとり、頭の辨琵琶ひは、琴ことは經孝朝臣きやうこ、左の宰相中將笙きやうの笛ふえとぞ。雙調そうてうの聲こゑにて、「あ
なたふと」次つぎに「むしろ田た」この殿と「なとうたふ。ごくの物は、とりの破急はきんをあそぶ。外との座ざに
ても、てうしなどを吹ふく。歌うたに拍子はうしうちたがへて咎とがめらる。「伊勢いせの海うみ」右みぎの大臣おほいぢ、和琴わびん、いとお
もしろしなど聞きはやし給たまふめりし。はてには、いみじうあやまちのいと惜おしきこそ、見る人の身
さへひえ侍りしか。御贈物おくりもの笛ふえ二つ、箱はこにいれてとぞ見侍りし。

寛弘七年十一月廿八日遷新造一條院中宮同行啓

寛弘七年

左大臣道長

右大臣顯光

內大臣公季

左方
右大將

內大臣伊周

正月廿八日薨三十七

大納言道綱

傳

實資

右大將按察使

權大納言齊信

中宮大夫

公任

皇太后宮大夫

權中納言俊賢

治部卿中宮權大夫
十二月廿七日正二位

中納言隆家

權中納言行成

皇太后宮權大夫侍從

頼道

左衛門督春宮權大夫

中納言時光

權中納言忠輔

兵部卿

參議有國 勅解由長官三月十六日修理太夫

懷平 右衛門督 春宮太夫

兼高 右中將

正光 大藏卿

經房 左中辨

實成 右兵衛督

頼定

左中將經房 參

公信 藏人從四位內藏頭

教通 從四位上十一月廿八日從三位行幸如元十五

少將濟政 十一月廿五日右中辨

兼綱 從四位下

忠經 藏人正五位下正月廿七日從四位下

定賴 二月十六日如元十二月廿七日正五位下

朝任 藏人從五位下十一月廿五日

賴宗 十一月廿八日正四位下

少將雅通 二月晦日兼木工頭

道雅 從四位下

好親 正月七日從五位上

定賴 任左

朝任 二月廿六日任元少納言任左

經親 二月廿五日任元左衛門佐

伏見宮邦高親王

御在判

右以伏見殿邦高親王御正筆之本書寫一校畢

明曆二年二月十八日 小少將

右此日記上下以戶川土佐守安宜所持之本令書寫者也
尤謬誤等多之

天和貳年十一月十四日

或説紫式部日記の中に有といひならはして物にかきたるは

三十講の五卷五月五日なり、けふしもあたりつらむ、提婆品をおもふにあしせんよりこの殿の御ためにや、このみもひろひおかせけんと思ひやられて、

たへなりやけふはさ月のいつかとしていつのまきにあへるみのりは

池の水のたゝへたる木のしたにかがりびに、みあかしの光あひて、ひるよりさやかなるを、見思ふことすくなくはをかしうもありぬべき折かなと、かたはしうち思ひめぐらすにも、まつぞ涙ぐまれける。

かがり火の影もさわがぬ池みづにいくちよすまむ法のひかりぞ

おはやけごとにいひまぎらはすを、大納言の君

すめる池のそこまでてらすかがり火にまばゆきまでもうきわがみかな

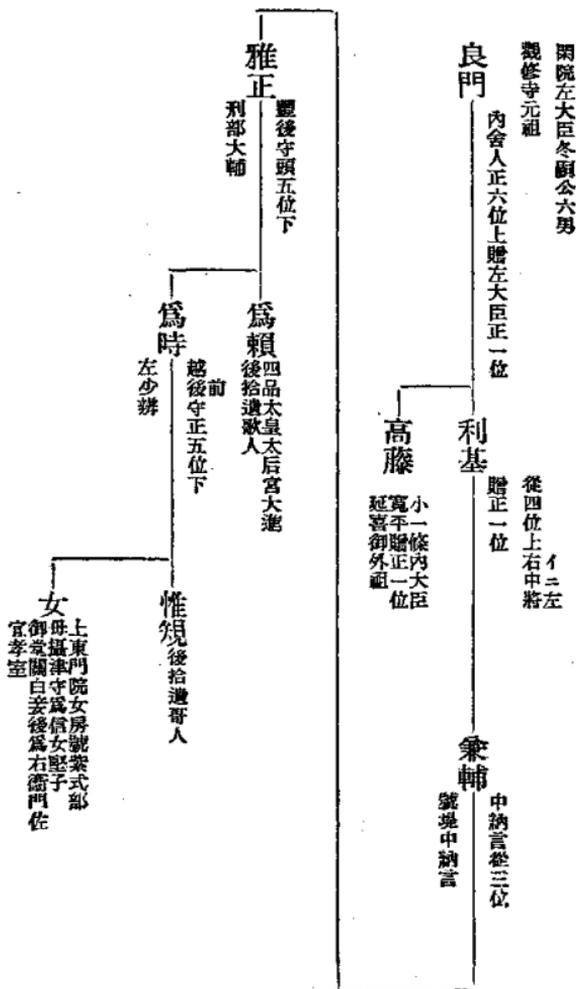
五月五日もろともにながめあかして、あかうなればいりぬ、いとながきねをつゝみて、さしいでままへり。小少將の君、

なべて世のうきにながるゝあやめ草けふまでかゝるねはいかが見る

かへし

なにごととあやめはわかでけふも猶たもとにあまるねこそたたせね
だいしらず

世の中を何なげかまし山ざくらはな見るほどのこころなりせば
後拾遺集二入



河海抄云紫式部は鷹司殿御堂關白北方一條左大臣雅信公女從一位倫子の官女也。相繼て上東門院に陪侍す。先祖右に註す。

後右衛門佐宜孝に嫁して大貳三位辨局狹衣作者を生。

又云式部舊跡は正親町以南京極西類今の東北院の向也。此院は上東門院の御所の跡也。

上東門院彰子御事一條院后也御堂關白道長公一女母從一位倫子長保元年十二月朔日入内二年十同二

年三月廿五日立后三年十寛弘九年二月十四日皇太后宮寛仁二年正月太皇太后宮萬壽三年落飾爲

尼九年册號上東門院法名清淨覺

紫式部 又云式部墓所は雲林院白毫院の南に有、小野篁が墓の西也。宇治の寶藏の日記にも紫野に有由見
 日 いたり。雲林院は淳和天皇の離宮也。賢木の卷に光源氏雲林院にて六十卷と云文をとかせ聞給ひ
 記 たりし所也。式部は檀那院贈僧正の許可を蒙て天台一心三觀の血脉に入れり。かねて雲林院の幽
 閑をしめけるも旁故あるにや。

古來より源氏物がたりの哥勅撰の集に入といひならはせり。されど中納言爲明卿子中納言爲明卿撰せられし新拾遺集卷第十九雜中の部に

里の名を我みにしれば山しろのうちわたりぞいとすみうき

紫式部と名をあらはしていれり、是宇治の卷浮舟の歌なり。

校訂者云

右紫式部日記本文中、字句の周圍を圍むに直線をもつてしたる部分は、もと原本に脱し、後校合の際、傍に追記したりと思はるゝものを示す。これ等の脱文は、古き邦高親王御自筆本系統の諸本には共通的に存せしものと想像せらるゝが故に、今面目を舊に復する意味に於て、特に箇所を示すこととしたり。

紫式部日記哥

三十講の五卷、五月五日なり、今日しもあたりつらん、提婆品を思ふに、あし仙よりもこの殿の御ためにや、木のみをもひろひおかせけんと、思ひやられて

妙なりやけふはさ月のいつかとしていつゝの巻にあへる御のりも

池の水の、ただこのしたに、篝火にみあかしの光あひて、晝よりもさやかなるを見、思ふ事すくなくばをかしうもありぬべき折かなと、かたはらうち思ひめぐらすにも、まづぞ涙ぐまれける

かがり火のかげもさはがぬ池水にいく千代すまむ法のひかりぞ

おほやけごとにまぎらはすを、大納言の君

すめる池の底まで照らす篝火にまばゆきまでもうき我身かな

五月五日、もろともにながめあかして、あかうなれば入りぬ。いと長き根をつつみてさしいで給へり、小少將君

新古
なべて世のうきにながるるあやめぐさけふまでかゝるねはいかが見る

かへし

軒同ごとにあやめはわかでけふもなほたもとにあまるねこそたえせね

九月九日菊の綿わたを、これとのうへおいのごひすて給たまへと、のたまはせつ
るとあれば

菊の露つゆわかゆばかりに袖ふれて華のあるじに千代はゆづらん

水鳥どもの、おもふ事なげに遊あそびあへるを見

水鳥をみづの上うへとやよそに見みんわれもうきたる世を過しつゝ

小少將君、文ぶんおこせ給ひつるかへりごと書かくに、時雨しぐれのさとかきくらせば、
使つかひも急いそぐ、そらのけしきも心地さわぎでなんとて、こし折をれたることや書か
き交まぜたりけん、たちかへり、いたうかすめたるこせん紙かみに

雲間よりながむる空そらもかきくらしいかにしのぶるしぐれなるらん

かへし

ことほりのしぐれの空は雲まあれどながむる袖そでぞかはく間まもなき

大納言君の、よるくはおまへにいと近ちかう臥ふし給ひつゝ、物語ものがたりし給しけは
ひのこひしきも、なほ世にしたがひぬる心地か

新勅
うきねせし水の上のみこひしくて鴨のうは毛にさえぞおとらぬ

返し

同
うちはらふともなき頃のね覺にはつがひしをしぞ夜半に戀しき

しはすの廿九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵ぞかしと、思ひいづれば、こよなうたちなれにけるも、うとましの身のほどやと、けはひことなり、里にて今はねなまし、さもいざときくつの繁さよ、などと色めかしくいふを聞き

年暮れて我世ふけゆくかねの本たれみよとかは聞くべかるらむ

又これより

忍ぶべき人なき身こそあはれなれ花をば後もたれか見ざらん

梅のつくり花を、まことの花にとり交せて

いづれとかわくべかるらん梅の花香をだにつくる人のありせば

梅の花を、鯛にかざして人のをこせたりしが、香の悪るかりしかば

春ごとにさくらだいは聞きかど梅をかざせるかぞつきにける

人のゆくに驚きて、はなやかに鳴きしに

みかりする人もこそ聞け春の野にたがくるとみて雉子なくらん

殿に侍従といひし人に、なり遠ものいひて後、加賀に下りておとづれざり

しを、はじめより知しことなればとて、なり遠にいひし

來てなればあはれならまし鶯の花によそなる春にありけり

梅の花を折りて、をさなき人の炭櫃にさしおきしに

うしろめた風ふかずともうづみ火のあたりの花は散りやまさらん

三月ばかりに、法輪にまうでたりしに、花はまだ咲かず、雨のいみじう降

りてやみにけるに、櫻の枝より雫のおつるを見て、花の散ると見ゆるかと

いひしに

つねはただ散るだに惜しき山櫻ふりにふるとも見ゆる雨かな

六條の源中將經房の君と花見んと契りて、遽に中将みだけ精進して、いか

にぞ花見にはありき給ふや、といひたるを、いか云ふべきとの給ひしに

我はまだ思ひもたへず山櫻君はみたけの山も越ゆらむ

お前の花盛りなる比、御物忌にて、外にわたらせ給ひしに、折りてまゐら

せしに

折こそあれにほふ盛りにあくがれてかへりて花の散るをうらむる

人のもとより、櫻の枝を、いとおほきにぞ折りておこせたりしに

わがために折れる心はうれしくて花をしますと見ゆる枝かな

花見にありきて

花にだにあはでやとこそ思ひしか今は命にまかせてぞ見む

帥殿物さわがしくおはしましし頃、親しき人のゆかり、しばし参るまじきと聞きしかば、里にてあるはるまたまゐらず

さしはへて君にもとはぬ花笠をいかでか雨の漏りて聞きけむ

又おほせられたりし

いはねども耳なれにける春雨に花のことばはふりにこそふれ

鷹司殿の御屏風の花み

春ごとにをしめど散るはつらけれど花の心をうらみてぞゆく

三月のつごもりにも、花の散るを人々惜しみし

惜しむにし花の散らずば今日もただ春行くところ餘所に見ましか

四月一日鞍馬に詣でたりしに、鶯の鳴きしかば

黄鳥のみなれにたる聲よりは山ほととぎす今日はなけかし

おなじ日、散らぬ櫻のありしを、人のがりやるとて

まだ散らぬ花に心をなぐさめて春すぎぬとも思はざりけり

あやめ

五月雨のいつか過ぎててもあやめ草軒のしづくは玉と見えけり

とこなつ

庭のおもにからの錦を織る物はなほとこなつの花にぞ有ける

五月五日、菖蒲を枕に置きたるを見て、人に忘れられたるむすめ

かはく間もなきひとり寝の手枕にあやめのねをやいとどかくべき

げにあはれに覺えていらへし

ふたり寢しとこふるるまであやめ草とはぬを我はあはれとぞみる

六月ばかりに、櫻井のひじりのもとに行きたりしに、鶯の鳴きしに

春めける聲に聞ゆる鶯はまださくら井にすめるなりけり

人のもとより、蓮の上葉に露おきて、蟬の死にたるを入れておこせて

なに事のうきぞうき葉にうつ蟬の涙をつゆとおきて消えける

とありし折しも、子供のいきたるにををつけて、持ちあそぶを取りておき

かへてやる

空蟬の露の命のけぬべきをたま〜むすびとどめたるかな

桶つけていひそめたりし人おとづれて、五月も過ぎしに、六月朔日頃、橋

に書きてヤリし

待ちててし五月のほども過ぎにけりはな橘はいかがなりにし

蟬せみのもぬけを見みて

消きえてのちわれ試こころみるわざもがなこはむしがらのあはれなるかと

鷹司殿御賀の御屏風のすずみに

河風かぜのたつともいはず涼しきはこのわたりまで秋あきや來きぬらん

六月ふたつありし年の後、六月七日源賢法眼がもとより

つねならばけふ急いそがまし七夕たなばたの天あまの羽衣はつろふうかぶべきかな

いでてヤリし 七夕のまへに月日のそふよりは 二有
あまりなぬかのあらはあれかし トイ本

なにせんに柳のまゆをわすれけん今日けふ七夕のいとにひくまで

たうき僧都の母、なか川の家いへつくりはてて、わたらんには先まづ消息せうそくいはん、

池のをかしきみせんと、ちぎりしかど、音ねもせでわたりにけるを聞ききて、

七月七日にヤリし

天河あまのがはけふやくと待ちたれば早くわたりて君は住すむとか

七月七日舉馬朝臣、女のもとにヤリしにかはりて

うらやまし今日を待ちてて七夕のいかなる心地してくらすらむ

かたらふ人、七月八日夜きて、物語して歸りぬるつとめてやりし

七夕のきのふ別れし袖よりも明くればけさぞわびしかりける

秋のはじめつかた、とこ夏につけて、たうき僧都の母

とこなつの花をのみ見てけふまでに秋をも知らですぎにけるかな

かへし

花はさはとこなつにのみにほひなん人の心に秋を知らせじ

京極殿の御障子の繪に、前栽うゑさせてをとこ見る所に、殿のおまへおほ

せられし

堀り植うる草葉に虫の音をそへて千代の秋まで聲をきかせん

とて、又よめとおほせられしに

花を見し野邊にこゝろをやりつれば宿まで千代の秋はへぬべし

前栽を牛にくはれて、それを見ていにしへ人、おのが家の花こそいとをか

しけれと、いひたるに、色々の花をやるとて

我宿をせめてみたれば秋の野に花はあきにしもあらず

人の音もせねば、あれよりなどか、ともかうもいはぬといひたるにや、に

なくさはかうはな色々にみえつめてやりて

かき絶えてをぎの葉風の音はせてなに手すさびにかくむすぶらん

八月十五夜

こよひこそ世のあた人はこひしけれいでてもかくや月をかたらむ

同夜すゑのりがあへりしにいはせし

君ならで人きたりせばとひてまし今宵の月はことに見ゆやと

鷹司殿の御賀の御屏風の歌、八月十五日夜

月かげはいつもあかねを今宵こそ秋のなかばはあはれなりけれ

秋法輪に参りたりしに、ある君だち、さが野に花みるついでに、來つらん

たよりとな思ひそとて、こはなん處とありしに

誰よりも來ずばいかにと待れまし花見つるともいふぞうれしき

くつは虫の近く鳴きしに

秋の野をわけてばかりは誰か來んくつはの聲の高くする哉

久しく音せぬに、萩につけてやりし

音づれぬひとの心のあきやときいかなる萩のはかはそよめく

秋雨のいみじう降りし比、車を見て、はぎを折りてひとのがりやりし
つま戀に鹿のしからむ秋萩をあめさへしほるをしきころかな

秋の夜ふくるまで起きあかして

諸共におきゐる草の露ならでたれとか秋の夜をあかさまし

嵯峨野に花見に行きたる人色々の花を折りてきといふ人にかはりて

花の色はゆきてみずとも秋の野を分くるまをこそ待つべかりける

大將殿の御心 かがれにならせ給へりし比、嵯峨野に花見になんゆくと

の給へりしに

わすれゆく心のあきのつらければ秋とは虫の聲にてぞしる

雁の鳴くを聞きて

起きもせぬ我がとこよこそかなしけれ春かへりこし雁のくる間は

二宮より歸らせ給ふとて、宿のまへをすぎさせ給ふに、風いたく吹きて、

尾花を折りてまゐらせし

我宿の庭の尾花の折れかへりまねくをだにも見てや過ぐべき

鷹司殿の御賀屏風の菊合に

白露のおくにあはせて菊の花霜にまさらむ色にさだめよ

菊を植ゑて花咲くほどに、とほくいにしへ人を思ひやりて

うつろはん色をだに見て菊の花ゆくらむ途の行方をぞ思ふ

鞍馬のうしろに、衣の瀧といふ所のありけるを

秋毎の紅葉の錦きて見るを衣の瀧といふにやあるらん

九月つごもり、業遠朝臣がいひたりし

けふはなほ同じ心に惜しまなん秋はてぬとはたれもおもはじ

返事

暮れはつる秋のひと日をとどめてもいくらなかひの心ならまし

閏九月つごもりに、兼綱の中將

なが月の日數まさされる年なれどあかぬは秋の別れなりけり

かへりごと

秋のただ日數はそはでけふはかくわかれぬ年のある世なりせば

遠き路に、薄の限り、はるばると多かるに、來し方行くさきも、いみじく

まねきしに、九月晦日なりしかば

いづ方にあきをさるらん花薄おちにもまねくこち風も見ゆ

十月朔日比、うつろひたる菊紅葉とをつみみて、人をおこせて
あきはてし今は限りのもみぢ葉とうつろふ菊といづれまされる

時雨いたくする比

おほえのためもと

神無月いまはめなれてつげずとも時雨るとだにも空に知らなん

返し

よとともにながむる空のけしきにも時雨るる空も知りぬべきかな

女院の菊合に

露よりも玉の台に菊の花うつろひてこそ色まさりけれ

庚申の夜菊をよみしに

月かげの菊にや霜はうつろはん夜こそ色の散まさりけれ

おなじ夜人にかはりて

しめのうちは風だによらぬ紅葉かな神の社はかしこかりけり

春花見し山寺に、紅葉みな散りはてて、庭につもりたりしに

花散りし庭に紅葉の積れるをいづれまさりて惜しとみえけん

ある山寺の湯屋の前に、しは木といふもの置きたるなかに、いと濃こき紅葉もみぢのまじりたるが、をかしう見えしに

青柴あせにまぜて織おりたるもみぢ葉は燃もえぬばかりの色いろもかひなし

物へ詣まぎでし途みちに、紅葉を人に見せんとて折をりたりしに、その人のいたく腹はら立つことのありし間に、かれに日ごろへてかう語かたりしを見て

つとにとて折をりし紅葉も枯れにけり嵐あらしのいたく吹きしまぎれに

十月ついたち頃ころ、賀陽院殿のもとにて紅葉の盛さかりなりしを見て

秋ゆけどのどけき宿の紅葉もみぢかな風かぜだに荒あく吹ふかぬなるべし

おきてゐる菊きくの葉分の露の上うへにこがねの波なみのかげぞうつろふ

紅葉見もみぢみにありきしに、獨ひとりみしがあかず覺おぼえしかば

誰たれにかはつげにやるべきもみぢ葉を思おもふばかりに見みん人もがな

となせに紅葉見もみぢみにゆかんと契あはりし人の、音おともせざりしにいひやる

うしろめたとくともいかでもみぢ葉はとなせの瀧たきの落おちもこそすれ

夜よ時雨よるの途みちに荒あくせしに、待まちつ人ありし頃ころ

いとどしくもの思おもふ夜半よるのひとり寝ねに驚おどくばかり降かる時雨よるかな

鷹司殿御賀の屏風の歌、家の紅葉見たる所

あすよりは四方の山邊を尋ねみん宿の紅葉はけふ見くらしつ

十月ばかり、ほかの紅葉皆散りはてたりし比、賀茂に詣でたりしに、中の社やしろのときは木の中より、紅葉のいとほなやかに見しに、同じ月の廿日あまりの程、有明の月のいみじう明きがかきしぐれ、またあかくなりつゝ、いとあはれなるを、獨ひとりお起きみて見しに

神無月あり明の月のしぐるるをまたわれならぬ人や見るらん

春日なる女のもとに初雪の降る日、たかちかがやりしにかはりて
み吉野の山の初雪ながむらん春日の里を思ひこそやれ

霜月ばかり、ものへ行く程に、方違にとて人の來たりしかば、殿居ものを
出だして、つかへわたりにかはば、つとめてとひたる

さむしろにとめじ毛衣しきつともきはけの霜はたれか拂はん

かへし

ひとり寝のおしの毛衣霜よりも置きては我ぞ思ひやりつる

御前みまへ近き花に霜のおきたるに、朝日に融けて下草の露と見しに

笹の葉に結べる霜のとけぬればもとの露ともなりにけるかな

大將殿の、あるところの五節のかしづきに、おはしうつりたりしに、例の
かはりて聞えし

天照らすとよの日影におもなれて山井のころもいづれめづらし

京極殿の御障子の繪に、せんさい植ゑて、をとこの見る所、との御まへ
あそばして、また詠めとおほせられしに

花をみし野邊に心をやりつれば宿にぞ千代の秋はへぬべし

巳上百十六首内他人歌十八首歟

入撰集不見此册歌

一條院御時、殿上人春の歌とてこひければ詠める
 み吉野は春のけしきにかすめども結ほほれたる雪の下草

題しらず

世中をなになげくまじやま櫻花見るほどの心なりせば

後一條院産れさせ給ひて、七夜に人々参りあひて、女房さかづき出だせと侍りければ

めづらしき光さし添ふ杯は持ちながらこそ千代もめでらめ

題しらず

おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも

遠きところへ罷りける人、まうで来て曉かへりけるに、九月盡る日、虫の音もあはれなりければ詠める

鳴き弱るま垣の虫もとめがたき秋の別やかなしかるらん

遠きところに行にける人の、なくなりにけるを、親兄弟など都にかへり來、

かなしき事いひたるにつかはしける

いづ方の雲路と知らば尋ねましつらはなれけむ雁の行方を

題しらす

千載
わすらるるうき世の常と思ふにも身をやるかたのなきぞわびぬる

十二月ばかり、門をたゞきかねてなん歸りにしと、恨みたりける男、年か

へりて、門はあきぬらんやと、いひて侍りければつかはしける

同
たが里の春のたよりに鶯のかすみに閉づる宿をとふらむ

上東門院に侍りけるを、里に出でたりける比、女房消息のついでに、筆の

ことつたへにまうで來んと、いひて侍りければつかはしける

同
露しげきよもぎが中の虫の音をおぼるげにてや人の尋ねん

題しらす

同
敷ならでこゝろに身をばまかせねど身にしたがふは涙なりけり

同
いづくとも身をやる方のしられねばうしと見つゝもながらふるかな

人につかはしける

新古
いるかたはさやかなりける月かげをうはの空にもまちし宵哉

かへし

よみ人しらず

同
さしてゆく山の端もみなかきくもり心の空に消えし月影賀茂にまうでて侍りけるに、人のほととぎす鳴かなんと申ける曙かたをか
のこずゑはをかしく見え侍りければ

ほととぎす聲まつ程はかたをかの森のしづくにたちやぬれまし

題しらず

同
たが里もとひもや來ると時鳥こゝろの限りまちぞわびにし

局ならびに住み侍りける頃、五月六日、諸共にながめ明かして、晨になが

きねを包みて、紫式部につかはしける 上東門院小少將

同
なべて世のうきに流るるあやめ草今日までかゝるねはいかが見る

かへし

なにごととあやめはわかで今日はなほたもとにあまるねこそ絶えせね

思ふ事侍りける頃、初雪の降り侍りけるに

降ればかくうさのみまさる世をしらであれたる庭につもるはつ雪

御一條院むまれさせ給へりける九月、月くまなかりける夜、大二條關白中

將に侍りけるに、若き人々さそひ出て、池の船に乗せて、中嶋の松蔭さし
まはすほど、をかしく見え侍りければ

新古

くもりなく千とせにすめる水の面に宿れる月のかげものどけし

上東門院少將身まかりて後、常にうちとけて書き交はしける文の、もの
のなかに侍りけるを見出でて、加賀少納言がもにつかはしける

たれか世にながらへてみん書きとめしあとは消えせぬかたみなれども

加賀小納言

なき人を忍ぶる事もいつまでぞ今日の命はあすの我身を

世のはかなき事を歎く頃、みちのくにに名ある所にかきたる繪を見侍りて
みし人の煙となりしゆふべより名ぞむつまじき鹽釜の浦

うせにける人の文の、ものなかなるをみ出で、そのゆかりなる人のもと
につかはしける

暮ぬまの身をば思はで人の世のあはれをしるぞかつははかなき

淺からずちぎりける人の、行きわかれ侍りける

北へ行く雁のつばさにことづてよ雲のうは書かき絶えずして

同
湖みづうみの舟にて、夕立のしぬべきよし申し侍るを聞きて、詠よみ侍りける
かきくもり夕だつ波のあらければうきたる舟ぞしづ心こころなき

四月祭まつりの日まで、花散り残りて侍りける年、その花を使少將のかざしにたまふ葉に、かきつけ侍ける

新古
神代にはありもやしけん櫻花け今日けのかざしに折れるためしは

同
七月十日の頃、月にきほひてかへり侍りければ

同
めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月つきかけ

法性寺入道前攝政太政大臣女郎花を折りて歌詠む

同
女郎花さかりの色いろを見るからに露つゆのわきける身こそ知らるれ

夜更ふけて、つま戸をたゞき侍りけるに、あけ侍らざりければ、朝につかはしける
法性寺入道前攝政太政大臣

新勅
夜もすがら水鶏よりけになくくぞまきの戸口にたゞきわびぬる

かへし

同
ただならじとばかりたゞく水鶏ゆゑあけてはいかに口惜くしからまし

夕月夜をかしき程ほどに、水鶏の啼き侍りければ 上東門院小少將

同
あまの戸の月のかよひぢさらねどもいかなる方にたゞく水鶏ぞ

かへし

同
まきの戸もささでやすらふ月影になにをあかずもたゞく水鶏ぞ

法性寺入道前攝政太政大臣家の屏風に

續後撰
くもりなき空のかがみとみるまでに秋の夜ながく照らす月かけ

松の葉に雪のこほれるを折りて、人のもとにつかはすとて

同
おく山の松葉にこほる雪よりもわが身世にふる程ぞ悲しき

東北院の渡殿のやり水に、かげを見て詠み侍りける

同
かげ見てしうき我涙おち添ひてかごとがましき瀧の音かな

人のおこせたりける文の上に、朱にて涙の色をかしくかきて侍りければ

續古
紅の涙ぞいとどたのまれぬうつる心の色と見ゆれば

戀歌とて

同
心だにいかなる身にかになふらん思ひしれども思ひしられず

紫式部がもとへ文つかはしける返事を、たまさかにのみし侍りけるが、な

ほかき絶えけるにつかはしける

をりくにかくとは見えてさゝがにのいかに思へばたゆるなるらん

かへし

しもがれの浅茅にまがふさゝがにのいかなる折にかくと見ゆらむ

ありしよを夢にみなして涙さへとまらぬ宿ぞかなしかりける

しほつ山といふ道を行くに、賤のをのいとあやしき様して、なほからき道
かなと云ふを聞きて、よみ侍りける

しりぬらんゆききにならすしほつ山世にふる道はからきものぞと

述懐のこゝろを

わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をやおもひ捨つべき

後一條院むまれさせ給ひての御五十日るとき、法性寺入道前攝政歌よめと

申侍りければ

いかにいかかが數へやるべき八千年のあまり久しき君が御代をば

かたがへに詣で來たりける人の、おぼつかなき様にて、かへりにけるあ
したに、あさがほを折りてつかはしける

後拾
おぼつかなそれかあらぬかあけくれのそらおぼれする朝顔の花

かへし

よみ人しらず

同
いづれなど色わく程に朝顔のあるかなきかになるぞ悲しき

同
かへりては思ひ知りぬや岩かどにうきてよりける岸のあだ波

津の國にまかりけるに、都なるともだちのもとにつかはしける

同
難波がたむれたる鳥ともろ共にたちぬるものと思はましかば

上東門院、中宮と申侍りける時、里より梅を折りてまゐらすとて

玉葉
むもれ木の下にやつるる梅の花風だにちらせ雲の上まで

七月一日あけぼのの空を見て詠める

同
しのよめの空きり濺りいつしかと秋のけしきに世はなりにけり

屏風の繪に、花見る女車あり、わらはの萩の花たちよりて折るところ

さをしかのしがならはせる萩なれや立ちよるからにおのれをれふす

里に侍りけるが、師走のつごもりに、うちに參りて御ものいみなりければ、

局にうちふしたる、人の忙しげにゆきかふ音を聞きて、思ひつづけける

同
としくれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

かどのまへを通るとて、うちとけたる様を見んと、人申して侍りければ、
かへり事にかきてつかはしける

同
なほざりのたよりにとはん人ごとのうちとけてしも見えじとぞ思ふ

霜月ばかりに、もの思ひける人の、うれへたりける返事につかはしける
霜こほりとちたる頃の氷壁はえも書きやらぬ心地のみして

東三條院、かくれさせ給ひにけるまたの年の春、いたくかすみたる夕暮に、
人のもとへつかはしける

同
くものうへにものおもふ春は墨染のかすむそらさへあはれなるかな

世中つねならず侍りけるころ、朝顔の花を、人のもとにつかはすとて
消えぬまの身をも知るく朝顔の露とあらそふ世をなげくかな

歌、繪にあまの鹽やく所に、こりつみたる木のもとにかきて、人のもとに
つかはしける

同
四方のうみに鹽汲むあまの心からやくとはかゝるなげきをやつむ

一條院位におはしましける時、内裏にて卯月の比、八重櫻咲きてはべりけ

るを見て詠める

同
九重にはほふを見ればおそ櫻重ねて來たる春かと思ふ

梨の花の、櫻とともに散りけるを見て詠める

同
華といはばいづれかにほひなしとみん散りかふ色のことならなくに

七夕の歌のなかに

同
おほかたを思へばゆかしあまの河今日のあふせはうらやまれけり

清水に籠りたりけるに、伊勢の大輔まりあひて、もろともに明かしたてまつりて、しきみの葉に書きつけてつかはしける

新撰
こゝろざし君にかゝぐるともし火の同じ光にあふがうれしき

かへし

伊勢大輔

同
いにしへの契もうれし君がため同じ光にかけをならべて

浅からずたのめたる男、心ならず肥前の國へまかりて侍りけるたよりにつけて、ふみおこせて侍りける返事に

新撰
あひ見んと思ふ心はまつらなるかがみの神や空にしるらん

題しらず

かき絶えて人もこずゑのなげきこそはてはあはでの松となりけれ
東三條院、かくれさせ給ひて又の年春、消息したるかへり事に
なにかこのほどなきそでをぬらすらんかすみの衣なべてきる世に

校訂者云

右日記歌中、「いづかたにあきをさるらん」の歌の次、圖書寮本には左の歌あり。

返し

紅葉のちるをも思ふ菊ならでみるべき花のなきもなげかじ

又入撰集不見此册歌中、「なきよはるまがきの虫もとめがたき」の歌圖書寮本にはなし。

昭和五年六月二十五日 第一刷發行
昭和二十九年九月三十日 第十六刷發行

業式部日記

定價四拾圓



改訂者

池田 龜 鑑

以行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩 波 雄 二 郎

印刷者

東京都板橋區志村町五番地
柳 川 太 郎

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二丁目三

株式
會社

岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

凸版印刷・永井製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら欲む。譬ては民を愚昧ならしめるために學識が最も狭き數字に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に散なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大衆生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典義の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其編當する學識解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重籌劃この際断然實行することにした。吾人は籠をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文學哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外流を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に濶く發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望することである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に成て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期行する。

昭和二年七月

岩波文庫新刊・近刊書 (七月・九月)

既刊二〇〇點 戦後復刊一四〇〇點

誹風柳 多 留(四) 山澤英雄校訂 ★★

地獄の花 水井荷風作 ★

風雨強かるべし上下 廣津和郎作 各★★★

はやり唄 小杉天外作 ★★

いさなとり 幸田露伴著 ★★

斷 橋 岩野泡鳴作 ★★

枯木の ある風景 宇野浩二作 ★

社會百面相下 内田魯庵作 ★★

阿呆物語下 望月市恵譯 ★★

説文庫解
目録解

「解説目録」を御希望の方は
最寄の書店でお求め下さい。

カザノヴァ回想録(五) 岸田國士譯 ★★

マリアンヌの氣紛れ ミエツセ作 ★★

ヘーロー 擬 曲 高津春繁譯 ★

美しき惑いの年 カロツサ作 ★★

三國志 第三册 小川環樹譯 ★★

息子たちと戀人たち(四) ロレンス作 ★★

暗黒事件 上下 バルザック作 各★★

クオ ヴァデイス下 シェンケヴィチ作 ★★

智慧の悲しみ 小川亮作譯 ★★

九大 刊 誌 文

ジエルミナール 中下 エミール・ゾラ作 安土正夫譯 各★★★

地獄 アンリ・バルビュス作 田邊貞之助譯 ★★★

アルターク英雄傳 (六) 河野與一譯 ★★★

道徳哲學 白井・小倉譯 ★★★

數理哲學序說 ラッセル著 平野智治譯 ★★★

基督抹殺論 幸徳秋水著 ★★★

フランス革命時代に おける階級對立 カウツキー著 堀江・山口譯 ★

日本資本主義發達史 野呂榮太郎著 ★★★

女工哀史 細井和喜著 ★★★

ルイ・ボナパルトの ブリュメール十八日 マルクス著 伊藤・北條譯 ★★

☆ 近 刊 ☆

お目出たき人 武者小路實篤作 ★★

二つの庭 宮本百合子作 ★★★

千一夜物語 (十三) 渡邊・佐藤譯 ★★

ハリス日本滞在記 下坂田精一譯 ★★

ムス痴愚神禮讚 渡邊一夫譯 ★★

ブヴァールとペキシユ上 フロベール作 鈴木健郎譯 ★★

口髭・寶石 他五篇 モーパッサン作 木村庄三郎譯 ★

國民教育と民主主義 クループスカヤ 勝田昌二譯 ★

革命と反革命 エンゲルス著 武田隆夫譯 ★★

